

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 588 集

## 平成 22 年度発掘調査報告書

立 花 南 遺 跡 上 日 影 遺 跡  
熊 の 沢 II 遺 跡 高 殿 II 遺 跡

ほか調査概報(26遺跡27調査)

2011

(財) 岩手県文化振興事業団

# 平成 22 年度発掘調査報告書

## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたつて大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、平成22年度に当センターが発掘調査をした遺跡の調査成果をまとめ、調査報告書及び調査概報として発刊するものです。全県下で30遺跡31件、約11万m<sup>2</sup>が調査され、旧石器時代から近世までの遺構、遺物が検出されております。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました委託者をはじめ、地元の各市町村教育委員会及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成23年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 池田克典

## 目 次

平成 22 年度の調査結果について ..... 1

### I 発掘調査報告

(1) 立花南遺跡（北上市）	5
(2) 熊の沢 II 遺跡（遠野市）	35
(3) 上日影遺跡（遠野市）	37
(4) 高殿 II 遺跡（奥州市）	39

### II 発掘調査概報

(5) 茅田沢田 IV 遺跡第 2 次調査（盛岡市）	59
(6) 茅田沢田 VI 遺跡（盛岡市）	60
(7) 向三遺跡第 2 次調査（遠野市）	61
(8) 尾肝要 1 遺跡（田野畠村）	62
(9) 姫松 I・II 遺跡（田野畠村）	63
(10) 大平野 II 遺跡（奥州市）	64
(11) 小屋野遺跡第 2 次調査（盛岡市）	65
(12) 高畠遺跡（矢巾町）	66
(13) 石崎貝塚（基幹農道整備事業関連）（一関市）	67
(14) 石崎貝塚（経営体育成基盤事業関連）（一関市）	68
(15) 国分遺跡（奥州市）	69
(16) 川端遺跡（奥州市）	70
(17) 堤遺跡（奥州市）	71
(18) 八反町遺跡（奥州市）	72
(19) 中畠城遺跡（奥州市）	73
(20) 堀田遺跡（奥州市）	74
(21) 机地遺跡（奥州市）	75
(22) 安久沢東遺跡（奥州市）	76
(23) 田高 II 遺跡（奥州市）	77
(24) 山脈地遺跡（住田町）	78
(25) 野古 A 遺跡第 30 次調査（盛岡市）	79
(26) 飯岡才川遺跡第 17 次調査（盛岡市）	80
(27) 細谷地遺跡第 26 次調査（盛岡市）	81
(28) 矢盛遺跡第 27 次調査（盛岡市）	82
(29) 中平遺跡（野田村）	83
(30) 佐原 II 遺跡（宮古市）	84

## 平成22年度の発掘調査成果について

平成22年度の発掘調査事業は23遺跡24件86,685m<sup>2</sup>で開始したが、年度途中での中止や追加を含めて最終的には30遺跡31件107,197m<sup>2</sup>の調査に着手した。本調査以外では、農業基盤整備事業等に関する試掘確認調査を実施している。

後期旧石器時代では奥州市中烟城跡(19)を調査した。石刃や剥片など10点ほどの後期旧石器時代後半の遺物が出土している。調査は次年度に継続する予定で、全容解明はそれ以降となる。

縄文時代では盛岡市芋田沢田IV遺跡(5)・小屋野遺跡(11)、奥州市大平野II遺跡(10)・田高II遺跡(23)、遠野市向三遺跡(7)、一関市石崎貝塚(13・14)、住田町山脈地遺跡(24)などを調査した。

芋田沢田IV遺跡は昨年に継続し、配石遺構の下位などを調査した。中期末～後期初頭の住居の他に、早期から前期初頭の堅穴住居跡が30棟以上からなる集落であることが判明した。同時期の集落としては最大規模となり、次年度に継続する調査が注目される。小屋野遺跡は後期中葉の堅穴住居跡7棟と晩期の堅穴住居跡1棟、土坑45基等が検出され、梁川流域の縄文時代集落の資料が追加された。大平野II遺跡は中期の堅穴住居跡1棟と土坑15基などが検出された。田高II遺跡は、堅穴住居跡1棟と陥し穴状遺構・遺物包含層などが検出され、前期を主とする上器が大コンテナで16箱ほど出土している。向三遺跡は陥し穴状遺構17基が見つかっている。石崎貝塚は貝層が区画整理等で破損を受けていたが、土坑11基と遺物包含層が検出されている。山脈地遺跡は晩期の堅穴住居跡1棟、長径14mを超える前期の大型堅穴住居跡2棟等の遺構と早期の貝殻文土器など大コンテナで80箱余りの遺物が検出されている。

弥生時代では、宮古市佐原II遺跡(30)がある。焼土と土器片等の出土である。

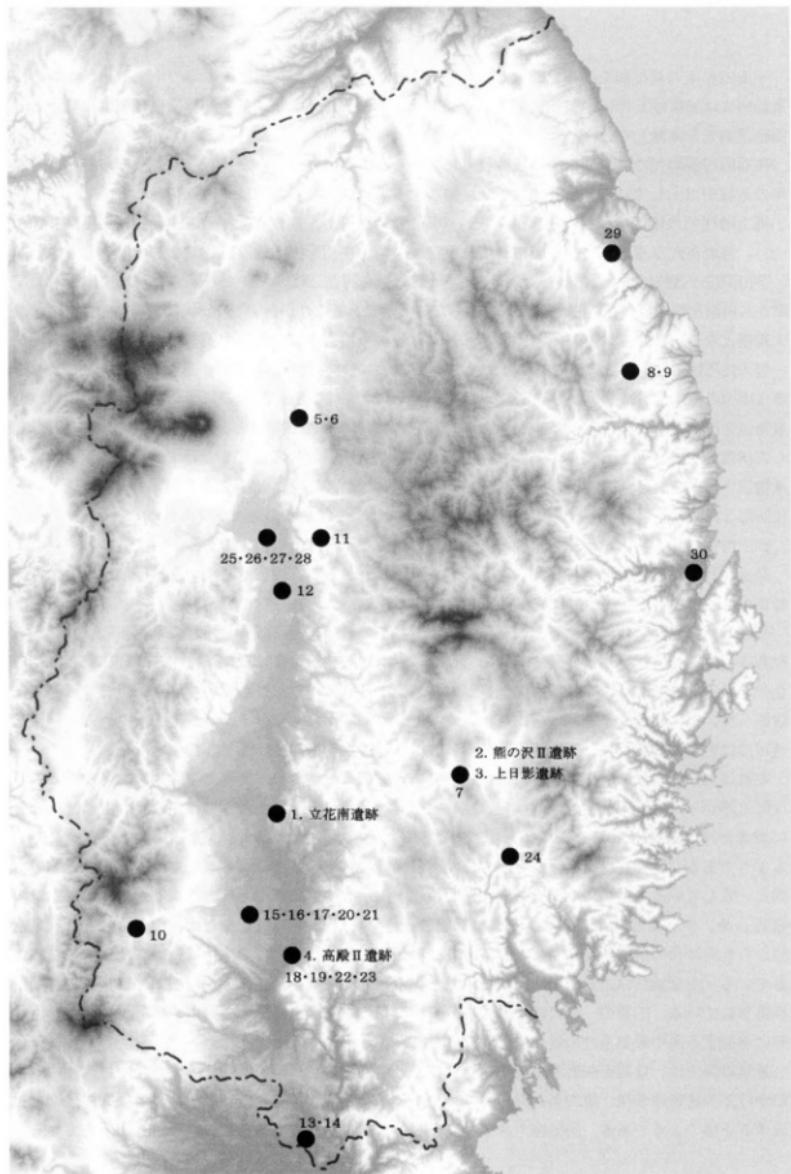
奈良時代は、盛岡市細谷地遺跡(27)・野古A遺跡(25)がある。細谷地遺跡からは堅穴住居跡1棟、野古A遺跡からは堅穴住居跡18棟が検出されている。

平安時代は縄文時代同様に多くの遺跡で検出されている。盛岡市細谷地遺跡(27)・野古A遺跡(25)・飯岡才川遺跡(26)、奥州市堤遺跡(17)・机地遺跡(21)、遠野市向三遺跡(7)、矢巾町高畠遺跡(12)などがある。堤遺跡は堅穴住居跡2棟、堅穴状遺構1棟などが検出されている。机地遺跡では堅穴住居跡5棟、堅穴状遺構1棟等が検出され、カマド跡や炉内から大量の土師器が出土している。細谷地遺跡では堅穴住居跡14棟、飯岡才川遺跡では3棟、野古A遺跡でも3棟検出されている。

中世は奥州市八反町遺跡(18)・中烟城跡(19)・安久沢東遺跡(22)・田高II遺跡(23)などがある。八反町遺跡からは12世紀後半の掘立柱建物跡5棟や井戸2基・道路跡などが検出された。道路跡は両側に側溝を持つ幅4mほどのもので、東西方向に延びており、西側で奥大道、東側は北上川に通じているようである。建物跡は二面庇のものほか、四面庇の仏堂のようなもの等があり、軸線は道路の方向と一致している。遺物は中世陶磁器・かわらけ・下駄等の木製品である。田高II遺跡では、中世の堀跡3条、中～近世の溝跡29条、掘立柱建物跡18棟を含む630余の柱穴などが検出され、安久沢東遺跡からも同時代の遺構・遺物が出土しており、奥州藤原氏時代の庶民の生活場所等が明らかになってきている。中烟城跡は、安永風土記に櫻山館と記載されている中世城館で、内堀の他に複数の外堀が検出されている。内堀の一部には土橋もあり、漆器等の木製品も出土している。細谷地遺跡では、北側に隣接する向中野館遺跡の堀の一部が確認された。

近世以降では、盛岡市矢盛遺跡で建物跡3棟や近世陶磁器、奥州市国分遺跡からは中世末以降近世にかけての建物跡5棟、溝20条、井戸6基、土坑13基などが検出された。建物跡は2面庇の建物と付属する小屋のようである。陶磁器や木製品・鉄製品の他に炭化種実や昆蟲の羽なども出土している。

(調査第一課長 佐々木清文)



# I 発掘調査報告

凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ : 42 × 32 × 30cm

中コンテナ : 42 × 32 × 20cm

小コンテナ : 42 × 32 × 10cm

たちばなみなみ  
**(1) 立花 南 遺跡**

所 在 地：北上市立花地区第10地割ほか

遺跡コード・略号：TM-10・ME 66-2128

委 託 者：国土交通省東北整備局岩手河川国道事務所

調査対象面積：4,900m<sup>2</sup>

事 業 名：北上川中流域治水対策事業（立花地区）

調査終了面積：4,900m<sup>2</sup>

発掘調査期間：平成22年8月2日～11月2日

調査担当者：星 雅之・菅野 桜

### 1 調査に至る経過

立花南遺跡は、「北上川中流部治水対策事業（立花地区）」の築堤盛土工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

北上川は、岩手県岩手郡岩手町御堂にその源を発し、幾多の大小支川を合わせて岩手県を南に縦断し、岩手・宮城県境の狭持部を経て宮城県石巻市で太平洋に注ぐ、幹線流路延長249kmの一級河川である。事業対象地域である「立花地区」は、北上川上流左岸76km付近に位置し、平成14年7月洪水及び平成19年9月洪水により、僅か5年間で2度も甚大な浸水被害が発生している。背後地には住家等の資産が集中していることから早期の治水対策が必要となっているため、事業着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、岩手河川国道事務所から平成21年8月27日付国東整岩工第一63号「埋蔵文化財発掘の通知及び試掘依頼【北上川中流部治水対策事業（立花地区）立花南遺跡】」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成21年9月7日に試掘調査を実施し、工事に着手するには立花南遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成21年9月16日付教生第795号「北上川中流部治水対策事業における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当事務所へ回答してきた。

その結果を踏まえて当事務所は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成22年7月29日付けで財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所)



## 2 遺跡の位置と立地

立花南遺跡は、JR北上駅から東へ約1km、北上市立花地区第10地割ほかに位置する。遺跡は北上川東岸の自然堤防及び氾濫原に立地し、標高は53~57m、調査区の現況は水田、畠地、造成地、原野などである。この遺跡は、過去に北上市埋蔵文化財センターにより発掘調査や試掘調査が実施され、古代の堅穴住居跡や土師器、須恵器及び繩文中期・晩期の土器が出土している。また、北約500mには平成21年度に当埋蔵文化財センターにより発掘調査された立花館遺跡が所在する。

## 3 遺跡の基本層序

基本層序は、試掘トレンチや調査成果から次のように捉えた。土質の表記は、主体を前頭に、客体を後に付している（※例として粘土が主体で砂が客体の場合は粘土質砂質土）。

- I 層・・・表土・現代の水田土・整地盛土層 層厚 80~150cm ※平均的には100cm前後の厚さでみられる。
- II 層・・・古代の遺物包含層で4つに分層される。
  - II a層・・・黒褐色シルト質粘土 層厚0~30cm 磨滅した土師器小片含む、古代以降の堆積層である可能性もある。
  - II b層・・・暗褐色粘土質砂質土 層厚0~30cm 磨滅した土師器小片を含む。
  - II c層・・・褐色砂質土 層厚30~100cm 土師器片含む。
  - II d層・・・暗褐色粘土質土 層厚20~50cm 土師器片と弥生土器含む。調査A区と調査B区においては、本層の中位くらいに十和田aテフラブロックの混入がみられる。
- III 層・・・褐色砂質土 層厚20~80cm 古代遺構の地山、縄文晩期・弥生土器出土。
- IV 層・・・黒褐色粘土質土 層厚0~30cm 縄文時代晩期頃の文化層と判断される。晩期の土器少量出土。
- V 層・・・黄褐色粘土（地山）

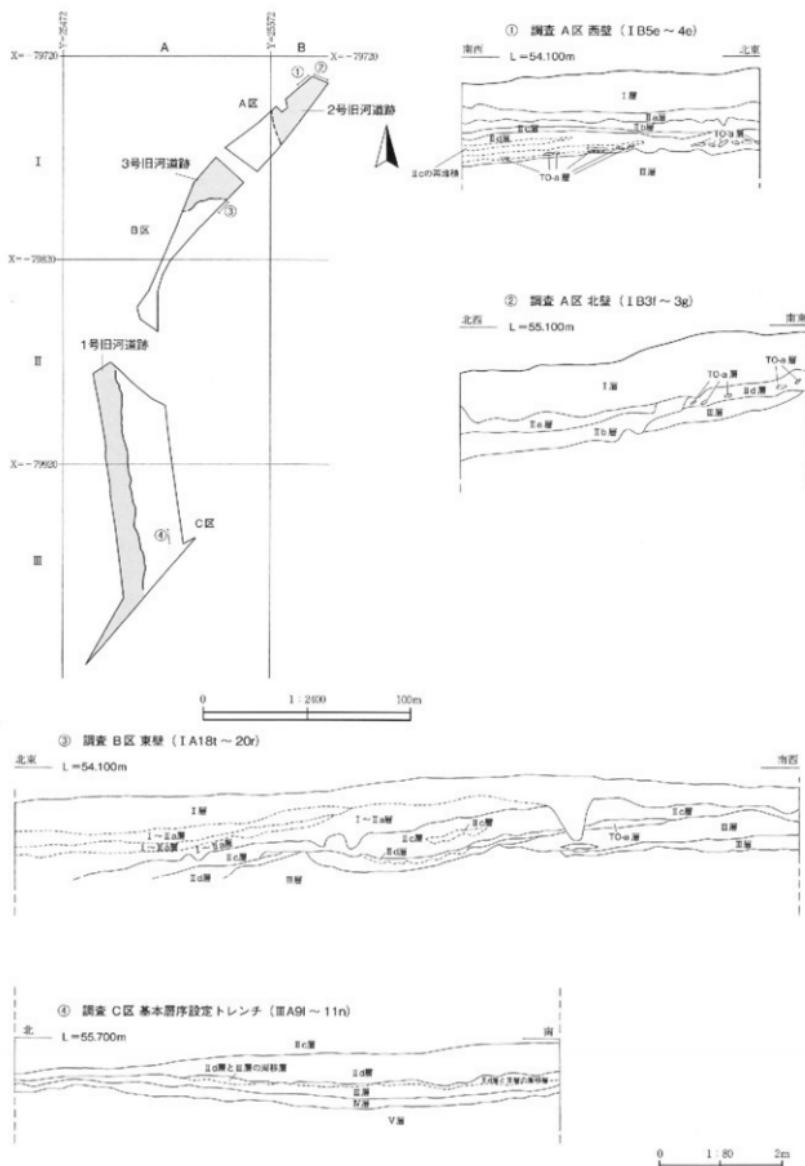
## 4 調査の概要

### (1) 調査方法

調査開始と同時に調査区内に試掘トレンチを設定し、人力で掘削して土層の堆積状況及び遺構検出面の確認に努めた。ただし、掘削深度が全般に深いため、作業の安全を優先して人力による掘削は現況表土から1.5m以内とし、それ以上深く掘削する場合はバックホーを行った。

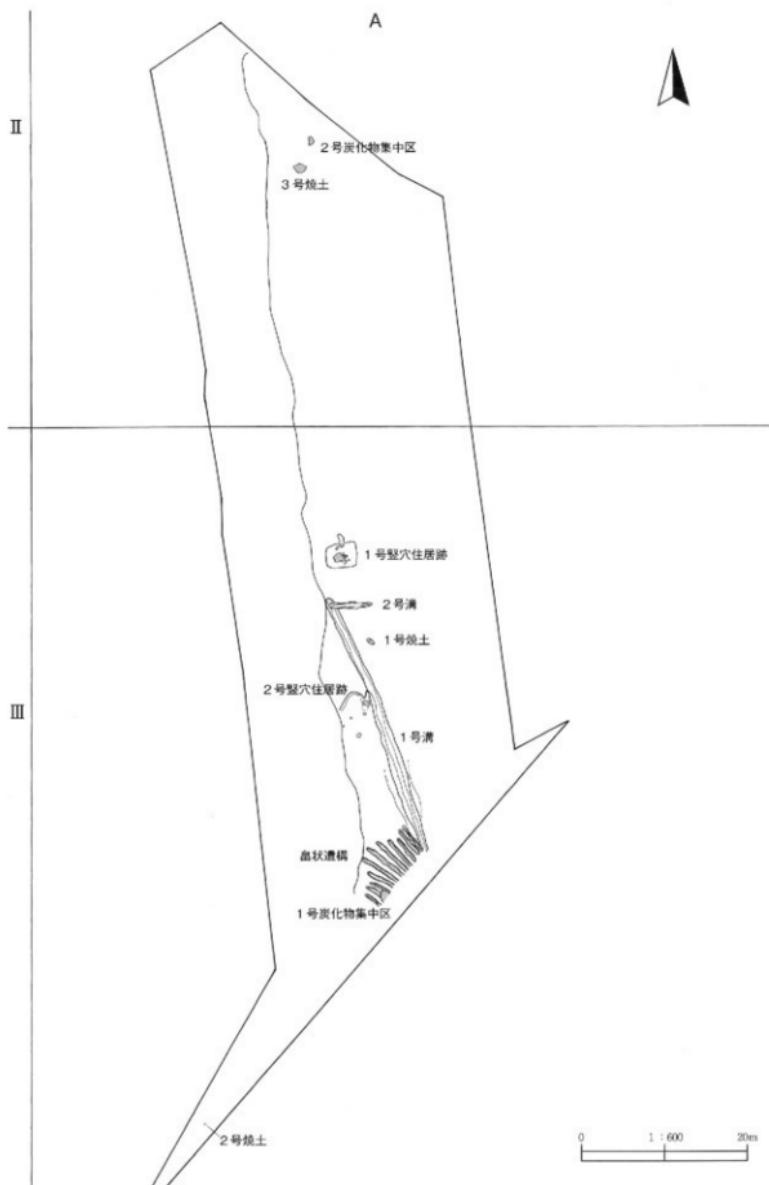
試掘の後、重機（バックホー）を用いて表土（主に水田耕作土や盛土）を除去した。今回の調査では、現況表土から遺構確認面までの深度が1.5m以上となることから（地点によっては2mを超える場合もあった）、調査の安全のため調査境に1~1.5mの幅で未掘削部分を残すか、若しくは法面の傾斜角度を60度前後として掘削した。表土除去後、人力で鏟籬、移植ヘラを用いて遺構の検出を行った。

区割設定は、世界測地系（平面直角座標X系）を座標変換した調査座標を用いて、調査区全体を網羅するよう設定した。調査座標原点は、X = -79720.000、Y = 25472.000を採用し、一辺100mの大グリッドを設定し、さらにこれを一辺4mの小グリッドに区割した。グリッドの名称について、



第2図 グリット図・基本層序

(1) 立花南道路(北上市)



第3図 遺構配置図

大グリッドは原点より北から南に向かってローマ数字の I → II → III ・・と、西から東に向かってアルファベットの A → B → C ・・と付した（第2図を参照）。小グリッドは、北から南へ算用数字の 1 ~ 25、西から東へアルファベットの a ~ y を付し、上記した大グリッドと組み合わせて「IA1a」「III A 1a」のように表した。

現場実測図は、平面図は電子平板を用い、断面図は原則的に1/20で従来の手実測で作成した。写真撮影は、6×7cm判のモノクロームとデジタルカメラの2台で行った。原則として報告書掲載用の写真是デジタルカメラで撮影したものを使用した。航空写真撮影は、セスナ機によりを行い、6×7cm判のモノクロとカラーの2種類を撮影した。

## （2）図 版 類

図版作成に係る内容を若干説明する。

＜遺構図版＞：遺構図版は、1/40、1/60、1/80、1/160など、遺構の性格に応じた縮尺を採用した。また、平面図より断面図の縮尺を大きくして明示したものもある。

＜遺物図版＞：遺物図版は、土器は1/3を原則として大きいものを1/4、鉄製品は1/2、石器は1/2若しくは1/3で掲載した。土器の中で内面黒色処理が施されるもの（1・2・7・8・18・21・22）と赤色顔料が塗布されるもの（16・17）、及び石器類で磨痕が観察されるものは、スクリントーンで明示した。

＜遺構写真図版＞：遺構写真図版の掲載順は、本文や遺構図版と同様である。

＜遺物写真図版＞：遺物写真図版は、遺物図版と同じ縮尺を基本とする。なお、19・24~26の赤彩土器及び焼成粘土塊は写真のみ掲載した。

＜遺物観察表＞：土器、石器、石製品などの法量値は、欠損する場合は残存部の数値を＜＞で示し、推定値は（）で示した。

## （3）検 出 遺 構

調査区が細長いことから、便宜的に北から調査A区・B区・C区の3つに分け呼称し、記述に用いている。現況地形は、調査A・B区が標高53~55m（旧地形は北上川河床との比高1.5m以内）、調査C区が標高55~57m（※旧地形は河床との比高2.5m以上）である。

また、今回の調査における遺構検出面は、試掘トレンチや調査区境などの土層観察結果から、概ね3面が想定された。1面がII b～II d層、2面がIII層、3面がIV～V層である。調査の結果、遺構は1面と2面から検出され、3面からは未検出であった。

弥生：焼土遺構1基、炭化物集中区1箇所（※検出面は何れもIII層）

古代：竪穴住居跡2棟、畠状遺構（畝間状遺構）1箇所、溝跡2条、焼土遺構2基（内1基は焼成土坑の類）、炭化物集中区1箇所、旧河道跡3条（何れも北上川の旧流路と推定される）

### 1号竪穴住居跡（第4図、写真図版3）

＜位置・検出状況＞調査C区のIII A 4 i グリッドに位置する。検出状況は、II d層下位～III層上面付近において、炭化物を少量含むII層系土の広がりとして把握した。検出プランは非常に不明瞭で、特に、南壁は認知できなかった。

＜平面形・規模・長軸方向＞南壁が把握できず、平面形は推定で明示した。規模は、壁が検出できた東西方向では3.9~4.2m、深さ20~28cmである。長軸方向は、ほぼ南-北である。

(1) 立花市遺跡（北上市）

＜埋上＞概ね黄褐色～褐色の粘土質砂質土の単層で、自然堆積層と推定される。堅穴中央の床面直上付近に焼土塊・炭化物・炭化材などが多量に認められる。

＜床面・壁＞床面はⅢ層黄褐色砂質粘土で、貼床は認められない。壁はほぼ直立気味に立ち上がる。

＜カマド＞北壁に構築されている。煙出・煙道部・燃焼部が検出された。煙出しには意図的に投棄されたと推定される礫が集中的にみられる。煙道部の長さは約1.3mで、削り抜き式であったと推定されるが明確ではない。燃焼部は50cmの円形気味に広がる。

＜柱穴＞検出されない。

＜遺物＞（第10・12図1～6・48、写真図版4・6）出土遺物は土器類が1423.9g、鉄製品1点（刀子）、焼成粘土塊34.2gが出土した。

＜時期＞出土土器から8世紀後半～9世紀前半と推定される。なお、焼失家屋の可能性が高い。

2号堅穴住居跡（第5図、写真図版3）

＜位置・検出状況＞調査C区のⅢ A 9 j グリッド付近に位置する。検出状況はⅡ d 層下位～Ⅲ層上面であるが、生涯学習文化課による試掘調査回答で土器集中区とされていた地点を掘り広げた結果、カマド煙道部を検出したことから認知した。平面プランはとても不明瞭であった。

＜重複関係＞1号溝跡・1号旧河道路跡に切られる。

＜平面形・規模・長軸方向＞南西壁・北東壁の一部を検出したが、南壁を検出できず、全体の平面形は不明にある。深さは約10cmである。

＜埋土＞黄褐色粘土質砂質土を主体とする。自然堆積と推定した。なお、第5図断面図の2層は貼り床、3層は整地層、4・5層は基本層序のⅢ～Ⅳ層で本遺構の地山と捉えられる。

＜床面・壁＞床面の特定が難しく、土層の断面観察からは当初4層付近が床面と捉え精査を進めた。最終的にはカマド燃焼部付近の標高を目安に判断した結果、2層が貼り床と判明した。なお、壁溝を覆う3層は整地層と捉えられることから、本住居は建て替えが行われている可能性が考えられる（※床の嵩上げか）。壁は外傾して立ち上がる。

＜カマド＞北東壁に構築されている。煙道部・燃焼部が検出された。煙道部は一部1号溝跡に破壊されている。残存値で約1.3m、掘り込み式であったと推定されるが明確ではない。燃焼部は85×52cmに広がる。

＜柱穴＞検出されない。

＜遺物＞（第10・12図7～17・44・49、写真図版4・6）出土遺物は、土器類6631.0g、石器1点（磨石）、鉄製品1点（刀子）、焼成粘土塊212gが出土した。

＜時期＞出土土器から8世紀後半～9世紀前半と推定される。

畠状遺構（第6図、写真図版4）

＜位置・検出状況＞調査C区Ⅲ A 13k～13m グリッドに位置する。Ⅱ d 層中でジョレン掛け作業中に、わずかな差異で周囲と土色の違う畝間状のプランを数条検出した。補足として、検出時は昨日からの雨が上がった時分で、周囲より若干乾き具合の悪い土質であったことも、検出に繋がる起因であったと思われる。

＜重複関係＞1号溝跡・1号旧河道路跡に切られ、合わせて1号炭化物集中区に覆われる。

＜平面形・規模＞長さ2.0～5.4m、幅25～45cmの溝条プラン11条が、溝間50～80cm（平均的には55cm前後）の間隔で平行して並ぶ。深さは15～20cmで、11条ほぼ均一にある。

＜埋土＞暗褐色粘土質土による単層である。各所に1～3%の炭化物が混入する。

＜出土遺物＞（第11・12図21・49、写真図版5・6）（写真図版45）出土遺物は土器類294.5gが出土した。土器類は8世紀後半～9世紀前半の土師器片が中心である。

＜時期＞出土遺物から8世紀後半～9世紀前半と推定されるが、明確ではない。

#### 1号溝跡（第7図、写真図版4）

＜位置・検出状況＞調査C区のⅢ A 6 i～Ⅲ A 14 mグリッド付近に位置する。Ⅱ b層中で黒褐色シルト質粘土による溝状のプランとして検出した。

＜重複関係＞2号堅穴住居跡・島状造構を切り、2号溝跡に切られる。なお、1号旧河道跡との新旧関係は明瞭には掴めなかったが、あるいは同時期存在の可能性もある。

＜平面形・規模・主軸方向＞調査区外南側に続くことから全長は不明にある。検出部での長さは33.5mである。溝幅が110～220cm、深さは最深で65cmを測る。主軸方向は北西～南東方向に延びる。なお、北側はⅢ A 6 iグリッド付近で途切れる。

＜埋土＞黒褐色粘土質シルトと褐色粘土質砂土に大別される。自然堆積と考えられる。

＜底面・壁＞底面は、全体的には平坦を基調とするが、やや凹凸がある。水が流れていたと仮定すると、溝底の標高からは南東→北西に緩く下る。壁はやや外傾しながら立ち上がる。

＜遺物＞（第11・12図18・19・40、写真図版5・6）出土遺物は土器類1978.6gである。磨滅した土師器を中心に、弥生土器や縄文晩期の小片が混じる。

＜時期＞出土土器は流れ込みと判断されることから、遺構の時期を推定する資料とは捉え難い。遺構の検出面がⅡ b層中であることから、相対的に十和田aテフラ降下期より新しいと捉えられる。

#### 2号溝跡（第7図、写真図版4）

＜位置・検出状況＞調査C区のⅢ A 6 j～6 kグリッドに位置する。Ⅱ d層中で溝状プランとして検出した。

＜重複関係＞1号溝跡を切る。

＜平面形・規模・主軸方向＞長さは5.3mで、両端が途切れる（※検出できなかった可能性あり）。溝幅50cm前後、深さ20cm前後を測る。主軸方向は東～西方向である。

＜埋土＞暗オリーブ褐色砂質粘土による単層で、酸化鉄の集積が顕著にみられる。自然堆積と判断される。

＜底面・壁＞底面は凹凸がある。壁は外傾に立ち上がる。

＜遺物＞土器37.2gが出土した。磨滅した土師器の小破片である。

＜時期＞1号溝跡より新しい。埋土の様相からは、古代と推定しておきたい。

#### 1号焼土遺構（第8図、写真図版4）

＜位置・検出状況＞調査C区のⅢ A 7 kグリッドに位置する。Ⅱ d層中で焼土粒と炭化物が顕著に認められたことから、焼土遺構として認知することとした。

＜平面形・規模＞平面形は梢円形で、北西から南東に広がる。焼土粒の広がる範囲は70×50cm、焼土粒の混じる土層の厚さは5～10cmである。

＜焼土の様相＞検出面付近は、1層褐色シルト質砂質土に炭化物・焼土ブロックが少量混じる様相で、その下位にみられる2層暗褐色粘土層中に多量の焼土ブロック（約15%）と炭化物が混入する。焼土

### (1) 立花南遺跡（北上市）

の色調は明赤褐色で、焼成状態は良好である。

＜地下構造＞焼土を含む土層の下部から上坑の掘り込みが検出された。長辺100cm、短辺64cm、深さ22cmである。

＜出土遺物＞（第11図21、写真図版5・6）出土遺物は土器類150.2g、鉄製品1点、焼成粘土塊98gが出土した。土器類は、8世紀後半～9世紀前半である。

＜時期＞出土遺物から8世紀後半～9世紀前半と考えられ、合わせて焼成土坑的な性格の遺構と判断される。

### 2号焼土遺構（第8図）

＜位置・検出状況＞調査C区のIII A22fグリッドに位置する。旧河道路跡の埋土中（第9図下の断面図7～8層）で焼土を検出した。

＜重複関係＞1号旧河道路より新しい。

＜平面形・規模＞平面形は方形気味で、焼土の広がる範囲は16cm四方、焼土粒の混じる土層の厚さは2～5cm前後である。

＜焼土の様相＞褐色砂土が焼土化している。焼土の色調は暗赤褐色で、現地性焼土で焼成状態はやや不良である。

＜出土遺物＞無し。

＜時期＞1号旧河道路の埋没途中で形成された焼土遺構と捉えられる。相対的に十和田aテフラ降下期より新しい。

### 3号焼土遺構（第8図）

＜位置・検出状況＞調査C区のII A17hグリッドに位置する。III層内で焼土が顕著に認められたことから、焼土遺構として認知することとした。

＜重複関係＞無し。

＜平面形・規模＞平面形は不整形で、焼土の広がる範囲は132×124cm、焼土粒の混じる土層の厚さは8～12cm前後である。

＜焼土の様相＞褐色粘土の一部が焼土化した様相である。焼土の色調は極暗褐色、現地性焼土で焼成状態はやや不良である。

＜出土遺物＞無し。

＜時期＞周辺のグリッドで弥生前期の土器がまとまって出土していることから、弥生時代前期と推定される。

### 1号炭化物集中区（第6図）

＜位置・検出状況＞調査C区のIII A15kグリッドに位置する。II d層内で多量の炭化物が集中して分布する状況を確認した。

＜重複関係＞本遺構が畠状遺構を覆う。ただし、同時期の可能性もある。

＜平面形・規模＞南側は調査区外に続いたため、平面形や規模は不明にある。炭化物の混じる土層の厚さは10cm未満である。また、焼土粒などは認められない（含まれない）。現地性と判断される。

＜出土遺物＞無し。

＜時期＞検出層位から古代に形成されたことは分かるが、詳細な時期は不明である。遺構同士の重複

関係から畠状遺構よりやや新しいか若しくは同時期に形成されたと考えられる。

## 2号炭化物集中区（第8図）

＜位置・検出状況＞Ⅱ A17 i グリッドに位置する。Ⅲ層中で多量の炭化物が集中して検出されたことから、炭化物集中区として認知することとした。

＜平面形・規模＞平面形は不整形で、85×65cmの範囲に広がる。炭化物の混じる土層の厚さは14cm前後である。これらの炭化物は投げ捨てられたものではなく、現地性と判断される。

＜出土遺物＞無し。

＜時期＞周辺のグリッドで弥生前期の土器がまとまって出土していることから、弥生時代前期と推定される。

## 1～3号旧河道跡（第9図、写真図版4）

＜位置・検出状況＞今回の調査では大きくは3地点で旧河道跡の輪郭（※旧北上川の岸と推定される）の一端を認知し、1～3号旧河道跡と命名した。

1号旧河道跡は調査C区において東壁を約60mに亘り検出した。検出面は、Ⅲ層で現況表土から2m以上下位である。ただし、調査区境で土層観察を行った結果、本来の検出面は上位のⅡ b層と判断される。

2号旧河道跡はA区の中央～北部にかけて、現況表土から2m以上掘り下げた段階で十和田aテフラが面的に分布する状況を確認した。調査区境などにトレーナーを設定し、十和田aテフラの下位の土層を掘り下げたところ、Ⅲ層相当の土層より酸化鉄を多く含む土層を確認し、更に調査A区中央付近のトレーナーでは河底付近であることが想定される礫層が表れた。この礫層が表れた付近は、十和田aテフラの分布が調査区西側や南側には延びず、調査区境東側に向かう様子であったことから、旧河道の肩部と想定し、第2図や第9図では推定線で示した。なお、土層の堆積様相は、第2図右上に掲載した調査A区調査区境の土層断面①・②を参照戴きたい。

3号旧河道跡はB区北部において左壁を検出した。この河道は明らかに十和田aテフラを含むⅡ d層相当を切る。位置は第9図を参照いただきたい。なお、3号旧河道跡の左肩は第2図や第9図に示したが、これより南側は2号旧河道跡と同時期の河道跡に伴う堆積層の可能性もある。ただし、この地点より南側については、遺構・遺物が認められなかったことから、生涯学習文化課の指示を受け、さらに下位までの掘削を行わなかったことから、詳細はわからない。

＜重複関係＞1号旧河道跡は、2号竪穴住居跡・畠状遺構を切る。

＜平面形・規模・主軸方向＞大部分が調査区外に續くことや、生涯学習文化課の調査指導に従い調査区内の旧河道跡全ての掘削は行わなかったことから、平面形や規模などの一切は分からぬ。また、深さについても、調査の安全性を優先して最深部までは掘削していない。参考までに、1号旧河道跡はⅡ A19 f、Ⅲ A 1 g・15 h グリッドにバックホーで深掘りを実施したが、検出面から2.5m以上（※現況表土からは4m以上）下がることが確実である。また、2号旧河道跡は、一部分十和田aテフラを含む上層下位の礫層まで掘り下げたが（現況表土から約2.5m）、遺構が未検出で遺物も少量であり湧水が激しかったことから、掘削を途中で中断した。3号旧河道跡は、調査B区の東側調査区境の一部で河底と判断される地層を確認したが、西側や南西側はさらに深く、掘削を断念した。

＜埋土＞暗褐色の砂質粘土、粘土、砂、粘土質泥土などが堆積する。基本的には砂と粘土の互層が顕著にみられる。第2・9図の土層断面図や写真図版2・4などを参照いただきたい。

## (1) 立花南遺跡（北上市）

＜遺物＞（第12図29・43・50、写真図版5・6）1号旧河道跡は土器類1103.7g・鉄製品1点・石器1点（4の環状石斧）・焼成粘土塊1.2gが、2号旧河道跡は土器類454.1gが、3号旧河道跡は土器類20.5gが出土した。1号旧河道跡は磨滅した土師器片を中心に、弥生や縄文晩期が少量混じる。28の土器は大洞C2式の胴部下半～底部までが残存する資料で鉢形土器（※壺の可能性もあり）と推定した。2・3号旧河道跡は磨滅の著しい土師器片が出土した。

＜時期＞出土土器は流れ込みと判断されることから、遺構の時期を推定する資料とは捉え難い。C区で検出した1号旧河道跡は、2号堅穴住居跡や畠状遺構より新しい。また、基本層序Ⅱc層を載ることを確認できた。A区で検出した2号旧河道跡は十和田aテフラを含むⅡd層より古いことは確実である。B区で検出した3号旧河道跡は、Ⅱc層を載る（新しい）ことから、相対的に十和田aテフラより新しい時期である。従って、今回の調査で判明した北上川の旧流路に伴うと推定される旧河道跡は、十和田aテフラを鍵層とすると、新旧2時期が検出されたと捉えられる（第9図を参照）。合わせて、1号旧河道跡と3号旧河道跡は同時期の流路の可能性も考えられよう。また、B区の調査境東側の土層観察からは、2号旧河道跡の堆積層と同様に十和田aテフラがレンズ状に堆積する土層が観られることから、3号旧河道跡より南側には古い時期である2号旧河道跡と同時期の流路跡が存在する可能性が高い。

### （4）出土遺物

今回の調査では、大コンテナ（42cm×32cm×30cm）で約3.5箱分の遺物が出土した。土器類は縄文土器、弥生土器、古代合わせて約3.0箱分、焼成粘土塊130.2g、鉄製品4点、石器25点、チップ・フレーク161.4gである。

古代の土器（1～27）：土師器は、堅穴住居跡及び調査C区Ⅱd層を中心にⅡb層～Ⅱc層、旧河道跡埋土から出土している。非口クロ成形によるものが大部分を占める。器種は壺、高台壺、甕がある。

壺をみると、内面黒色処理が施され、①胴部の段がやや不明瞭で丸底のものと、②胴部の段がほとんどなくなり底がほぼ平底のものがある。大きく8世紀後半～9世紀前半の時期幅で捉えた場合、前者が古い段階、後者が新しい段階と考えられている（北上市教育会：2005）。今回の調査では全体的には②の新しいと推定される段階が多い。

甕は長胴甕と球胴甕がある。長胴甕は、口縁部付近の器形の様子や外面の調整などからは、規格性の高いものと判断される。大きさは、口径14～20cm（推定値含む）、底径8～8.5cm、器高は11の略完形個体から32.1cmを測る。傾向として、1号堅穴住居跡出土はやや小形のものが、2号堅穴住居跡から大形のものが出土している。球胴甕は赤色の顔料が施された赤彩土器が観者にみられるが、赤彩が施されるものは外面の胴部にはミガキが施される（16・17など）のに対し、赤彩の施されないものはヘラナデによる調整が施される（掲載した中では15が該当）。規模は口径の推定値が得られる16は約35cm、底径は17から8cm、器高を把握できる資料はない。赤彩土器は、比較的多くの破片数を得られている。その中で、16・17及び写真掲載のみ行った19・24～26を選択した。口縁部資料である19・24～26は縦に線状の赤彩文様が施される。16・17を見る限り、胴部は全面に亘り赤彩が施される。なお、今回の調査で赤彩が認められる器種は球胴甕のみである。

須恵器は総数5点と非常に少なく、また20を除き何れも3cm前後の小破片であった（※不掲載4点も壺と推定される）。

縄文時代晩期の土器（28）：調査C区1号旧河道跡の埋土から土師器などに混在して出土している。本来の出土層位と考えられるIV層からは微量であった。掲載した28の大洞C2式の鉢形土器1点以外

は全て小破片である。大洞C 2式以外に大洞A式が認められる。

弥生時代の土器（29～39）：調査C区から出土しており、特に調査C区北東端付近より纏まりをもった状態で出土している。層位的には、Ⅲ層を中心にⅡ d層とⅢ層の漸移層、Ⅲ層の再堆積層（※Ⅱ A15 h～16 i グリッドの調査区東境付近）からの出土が多い。29～39の11点を掲載した。地文は、LRとRLの2種類が認められる。原体を施文する回転方向は、傾向として浅鉢は横回転を、深鉢は縱回転が多い様相である。33や34は、比較的太めの深い沈線が引かれる。沈線の断面形は逆台形状を呈する。36～38は同一個体で、胴部はRL・LRの横位回転による羽状縄文がみられる。時期は、弥生時代前期の土器群で、北上市金附遺跡第Ⅲ群1～2類相当と観てとれることから、広義の青木畠式と考えられる。

焼成粘土塊（写真図版6に集合写真で掲載）：130.2gが出土した。焼成粘土塊は写真掲載のみ行った。土器焼成時の失敗品などの可能性が考えられようか。1・2号堅穴住居跡や1号焼土造構などから出土している。

石器類（40～47）：石器類は25点出土した。剥片石器は石鏃1点、石匙1点（未成品か）、スクレーパー2点、疊石器は磨製石斧1点、環状石斧1点（未成品）、磨石6点、器種不明10点が、石製品は石刀3点である。その内、8点を掲載した。1号旧河道跡出土の43は環状石斧の未成品と判断され、表裏全面に観られる磨り痕を剥離が切っている。従って、礫を研磨した後、外形の整形途中で製作放棄された資料と考えられる。類例は北上市金附遺跡に多い。

鉄製品（48～51）：4点出土した。器種の内訳は、刀子2点、釘？2点である。48は木質部が残存する。掲載した4点は、整理期間の関係もあり保存処理前の段階で実測・遺物写真撮影を行っていること補足しておく。

## 5. 総括

縄文時代：縄文時代晩期中葉の土器は、調査C区の旧河道跡の埋土を中心に少量出土した。

弥生時代：弥生時代前期の土器や石器は、調査C区北東端付近（Ⅱ A15 h～16 i グリッド）を中心に、1号旧河道跡の範囲外東側に位置する微高地全般から出土した。堅穴住居跡などは検出されなかつたが、調査C区の北東外側の畠地部分などには該期の集落跡の存在が予見される。また、環状石斧の未成品が出土したことも特記事項として挙げておきたい。

古代：調査C区より、堅穴住居跡、畠状遺構、焼土、溝跡の検出があった。堅穴住居跡、畠状遺構、1号焼土造構は、出土している土師器の年代から8世紀後半～9世紀前半を中心とする。対して、1号溝跡や2号焼土造構はそれより新しい時期であり、基本層序との対比関係から十和田aテフラ降下期より新しいと推定される。つまり、十和田aテフラ降下期を挟み、新旧の人的営みが発見されたと捉えられる。特徴的な遺物としては、赤彩土器が挙げられ、2号堅穴住居跡を中心に造構外からも出土している。今回の調査では、赤色顔料の塗布される器種は球形壺にのみ認められた。高橋静歩氏の研究（高橋：2007）に従えば、赤彩壺・甕編年の3期（9c前半）を中心に2期（8c中葉～後葉）に相当するものが出土していると捉えられる。

集落の立地に關係が深い旧河道跡は、3条検出された。何れも古代の北上川旧流路の一部と推定される。十和田aテフラとの層序関係から、1・3号旧河道跡は同テフラ降下期より新しい時期、2号旧河道跡は同テフラ降下期より古い時期と捉えられる。古代の遺構検出地は、現在の北上川河床より4～5mは高く（標高54～57m）、尚且つ河道の外側に相当する微高地状の地形部分（※自然堤防の

(1) 立花南遺跡（北上市）

先端部に相当するものか）に占地している様相で捉えられよう。さらに、北上市埋文による過去の調査事例を加味すると、立花南遺跡における古代集落の中心は、今回の調査区よりやや離れた北東側が中心と捉えられる。従って、調査C区の調査により、立花南遺跡における古代集落南端付近の様子が判明したものと考えられる。

最後に十和田aテフラの分布様相について補足する。今回の調査では、調査A・B区からはⅡd層中より十和田aテフラの良好な堆積状況が確認されたが、古代の遺構や弥生土器が顕著に出土した調査C区からは一切検出されていない。従って、同テフラの降下期には堅穴住居跡などは既に埋没していたと判断される。推定の域は出ないが、古代の主たる遺物包含層であるⅡd層は、比較的長い時期を包括する文化層の可能性が考えられることと、Ⅱd層形成期の後半に調査C区に十和田aテフラが残らないような、洪水など何らかの自然現象が生じた可能性も合わせて考えられようか。今回の調査は、当初の予想より遺構・遺物は少なかったが、河川作用の土層観察における良好なサンプルデータを残すことができたと思われる。

なお、立花南遺跡の平成22年度調査に関する報告はこれをもって全てとする。

#### 参考文献

- 金子昭彦：2006「Ⅶ考察 1 純文時代晩期末～弥生時代中期土器の壺式瓶年の検討」『金附遺跡発掘調査報告書』  
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第482集 p242～254
- 杉本 良：2001「赤彩球崩壊再考（1）」『北上市立博物館研究報告』第13号 p1～8
- 高橋静歩：2007「東北地方北部の赤彩土師器から蝦夷集団の動向を探る」『岩手考古学』第19号 p21～47
- 北上市教育委員会：2005「立花南遺跡」北上市埋蔵文化財調査報告書第82集
- 北上市教育委員会：2007「北上市内試掘調査報告」北上市埋蔵文化財調査報告書第95集
- 北上市教育委員会：2008「北上市内試掘調査報告」北上市埋蔵文化財調査報告書第100集

土器観察表

番号	出土位置	時期	器種	部位	外腹	内面	底部	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	備考
1	1号竪穴住居跡 Q1 野十位	古代	环	口縁部	口:ミガキ 刷:ハケヌ	ミガキ		—	—	<3.0>	内面墨色処理
2	1号竪穴住居跡 Q3 野十位	古代	环	口縁部	口:ミガキ 刷:ヘラナダ	ミガキ		(12.4)	—	<3.0>	内面墨色処理
3	1号竪穴住居跡カラマ P1号竪穴住居土	古代	長胴壺	口縁部	口:横ナデ 刷:ハケヌ	ナデ, ハナダ		(14.2)	—	<5.0>	
4	1号竪穴住居跡 Q3 野十位	古代	長胴壺	口縁部	口:横ナデ 刷:ハケヌ	ナデ, ハナダ		—	—	<6.0>	
5	1号竪穴住居跡 球	古代	長胴壺	口縁部	口:横ナデ 刷:ハケヌ	ナデ, ハナダ		(14.6)	—	<14.0>	
6	1号竪穴住居跡 球	古代	長胴壺	口縁部	口:横ナデ 刷:ヘラナダ	ナデ, ハナダ		—	—	<9.0>	
7	2号竪穴住居跡 土中	古代	环	口縁部	ミガキ	ミガキ	丸底、ミガキ	(11.4)	—	4.45	内外面墨色処理
8	2号竪穴住居跡 Q3 1層	古代	环	口縁部	ヘラナダ	ミガキ		—	—	<3.0>	
9	2号竪穴住居跡 土中	古代	高台环	刷:部	ミガキ			—	8.4	<3.0>	外面部墨、内面部墨色処理、 却端に孔(4個)
10	2号竪穴住居跡 Q3 1層 南壁部上・壁 埴土	古代	壺	腹-底部	ヘラ	ナデ		—	<8.0>	<8.0>	
11	2号竪穴住居跡カラマ P1号竪穴住居跡 土中	古代	長胴壺	略完形	口:横ナデ 刷:ハケヌ	ハケヌ	木葉痕	(20.0)	8.5	32.1	
12	2号竪穴住居跡カラマ P2号竪穴住居跡 土中	古代	長胴壺	刷:底部	ハケヌ	ハケヌ	木葉痕	—	8.0	<29.0>	
13	2号竪穴住居跡 球	古代	長胴壺	口-部	口:横ナデ 刷:ヘラナダ	ナデ, ハケヌ		(19.4)	—	<6.0>	
14	2号竪穴住居跡 Q3 球土中	古代	長胴壺	口-部	口:横ナデ 刷:ケズリ	ミガキ		(19.0)	—	<5.0>	
15	2号竪穴住居跡 球 土中	古代	球底壺	刷-部	口:横ナデ 刷:ヘラナダ	ナデ		—	—	(10.5)	
16	2号竪穴住居跡 Q2 1層 横上・下位 中位	古代	球底壺	口-部	口:横ナデ 刷:ミガキ	ヘラナダ		(25.0)	—	<17.0>	赤彩施、表裏に赤彩
17	2号竪穴住居跡 壁	古代	球底壺	刷-底部	ミガキ	ナデ, ハケヌ		—	8.0	<9.0>	赤彩施
18	1号溝跡 采塙跡	古代	环	略完形	ミガキ、ナデ	ミガキ		105	40	4.3	内外面部墨色処理 赤彩施、表裏に土面上の赤彩
19	1号溝跡 壤土中	古代	球底壺	口縁部	ミガキ			—	—	—	
20	1号曲状造形 壤土	古代	球底壺	刷-部	ミガキ		平底	—	(8.0)	<3.0>	
21	1号窓十造構 1層	古代	环	口-底部	ヘラナダ	ミガキ	丸底、ミガキ	(11.8)	(8.0)	4.6	
22	皿八 6 呉 13.1 Ⅱ	古代	环	口-部	口:ミガキ 刷:ハケヌ	ミガキ	丸底、ミガキ	(12.4)	—	<4.0>	
23	皿 A 11 1 - 11 m II d 呉 II b - II c	古代	小形壺	口-底部	口:横ナデ 刷:ハケヌ	ハケヌ	平底、木葉痕	11.6	(13.8)	(7.5)	
24	皿 A 10k II 2 呉	古代	球底壺	横ナデ		ミガキ		—	—	—	赤彩施
25	皿八 10 呉 II 4 呉	古代	球底壺	横ナデ		ミガキ		—	—	—	赤彩施
26	皿 A 10k II 4 呉	古代	球底壺?	横ナデ		ミガキ		—	—	—	赤彩施
27	皿八 13 k II 4 呉	古代	鉢	略完形	口:横ナデ	ヘラケズリ	ハケヌ	137	8.5	9.1	
28	1号横沟造形 (皿 A 11)	古代	碗	刷-底部	L R横模造→横模造→刷	ミガキ	平底、ミガキ	—	6.0	<4.0>	大湖C2式
29	皿 A 16 1 豆皿	弥生前期	鉢	略完形	口:無文 刷:R斜刷	横ミガキ	平底	11.7	5.4	9.2	
30	皿 A 15b - 16 1 壁 生糞跡	弥生前期	深鉢	口-部	口:横ナデ 刷:口:無文 刷:R斜刷	ケズリ、ナデ	(9.0)	—	<9.0>		
31	皿 A 15b - 16 1 壁 生糞跡	弥生前期	浅鉢	略完形	口:無文 刷:R斜刷	ミガキ	12.2	6.5	17.6	外面部墨、内面部白 斑痕じりの土層より出土	
32	皿 A 15b - 16 1 壁 生糞跡	弥生前期	浅鉢	口-部	口:無文 刷:R斜刷	ミガキ	(12.3)	—	<5.0>	内面部白背景、灰泥じり の土層より出土	
33	皿 A 15b - 16 1 壁 生糞跡	弥生前期	浅鉢	口-部	口:要和干字文、平行沈模 刷:R斜刷	ミガキ	—	—	—	灰泥じりの土層より出土	
34	皿 A 15b - 16 1 壁 生糞跡	弥生前期	浅鉢	口-部	変形工字文、平行沈模	ミガキ	—	—	—	灰泥じりの土層より出土	
35	皿 A 6 1 並列	弥生前期	鉢	刷-底部	素面	ミガキ	平底、刷:代模、 指:底	—	8.7	<5.0>	
36	皿 A 10k Ⅲ層	弥生前期	浅鉢	口-部	口:無文 横:斜位平行沈模、斜突列 刷:R斜刷	ミガキ		—	—	37-38と同一個体	
37	皿 A 10k Ⅲ層	弥生前期	浅鉢	口-部	口:刷:無文 口:無文 横:斜位平行沈模、斜突列 刷:R斜刷	ミガキ		—	—	36-38と同一個体	
38	皿 A 10 k 並列	弥生前期	浅鉢	刷	R L R斜位平行沈模(横位)	ミガキ		—	—	36-37と同一個体	
39	皿 A 10 6 - 11 m II d 並列	弥生前期	深鉢	刷	口:無文 刷:R斜刷	粗ナデ	斜代模	—	8.9	<15.0>	

## (1) 立花南遺跡（北上市）

焼成粘土塊観察表

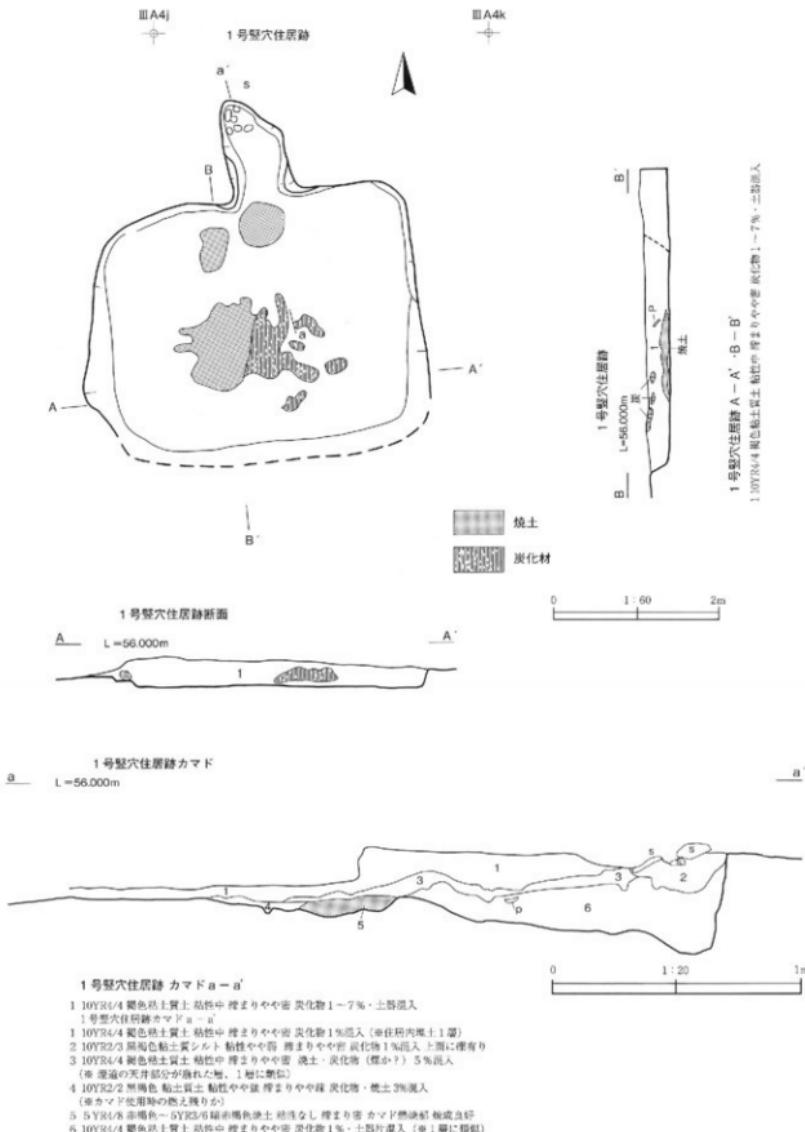
件登録 No	出土地点	層位	重量(g)	備考
1	I 号堅穴住居跡東西ベルト	堆土下位	7.8	
2	I 号堅穴住居跡	堆土中	16.8	指標ある資料有り
3	I 号堅穴住居跡 Q2	I 層下位	5.5	
4	I 号堅穴住居跡 Q3	堆土下位	2.7	
5	I 号堅穴住居跡	堆土下位	1.4	
6	C 区第2トレンド	表土	9.6	
7	1号旧河遺跡（II A13kより東）	II c 層下位	1.2	
8	C 区南端壁面	II 壁（II 層上面-120cm）	2.0	
9	C 区北東端	III 層	1.4	
10	III A12 j	II c 層	4.2	
11	III A12 k	II d 層	4.2	
12	III A12k	II c 層	8.0	
13	III A13 k	II d 層	2.4	
14	III A13 k	II d 層	1.3	
15	III A13 k	II d 層	5.7	
16	III A 1 l	II d 層	1.5	
17	III A12 l	II b ~ II c 層	13.0	指標ある資料有り
18	2号堅穴住居跡	南壁堆土	7.6	
19	2号堅穴住居跡カマド揮道部	揮道壁上	10.4	指標ある資料有り
20	2号堅穴住居跡カマド揮道部	カマド6層	1.7	
21	2号堅穴住居跡カマド廻辺	堆土下位	0.6	
22	2号堅穴住居跡 Q3	I 層	0.9	
23	1号地上遺構	I 層	20.3	指標ある資料有り

石器類観察表

件数番号	出土地点	器種	石質	産地	時代	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
40	I 号漢跡 墓土上	石器	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	<2.3>	1.2	2.3	11	
41	II A13-10j I 層	石匙	頁岩	北上山地	古生代後期	7.8	3.4	0.8	21.0	石化(未完成)
42	III A13-10j I 層	敲製石斧	四綠岩	北上山地	中生代白堊紀	<3.7>	4.7	<1.9>	47.6	
43	1号旧河遺跡 II 層	鐵製石斧	頁岩	北上山地	古生代後期	11.9	9.9	4.9	723.5	鐵(未完成)
44	2号堅穴住居跡南北ベルト I 層	石斧	ディサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	13.5	9.1	3.2	535.7	
45	III A6-1個	石刀	ホルンフェルス	北上山地	古生代?	<11.3>	4.3	1.4	79.2	中生代白堊紀に変成
46	III A13k	石刀	頁岩	北上山地	古生代後期	<8.0>	4.2	2.0	94.6	
47	III A12l	石刀	ホルンフェルス	北上山地	古生代?	<7.4>	3.6	1.6	60.2	中生代白堊紀に変成

鉄製品観察表

件数番号	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
48	I 号堅穴住居跡	堆土下位	刀子?	<15.5>	2.1	0.7	17.8	
49	2号堅穴住居跡 Q1	堆土中	刀子	<15.9>	2.1	0.6	27.1	木質部の残存あり
50	1号旧河遺跡(II A13 i)	旧河遺跡	不明	<4.85>	1.5	0.5	6.2	
51	III A12 k	II c 層	釘	<12.6>	1.0	0.5	11.3	

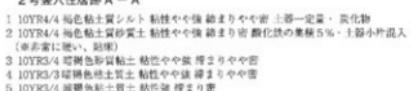


第4図 1号竖穴住居跡

(1) 立花南遺跡（北上市）



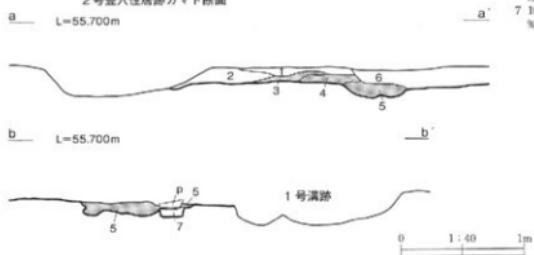
2号竪穴住居跡 A - A'



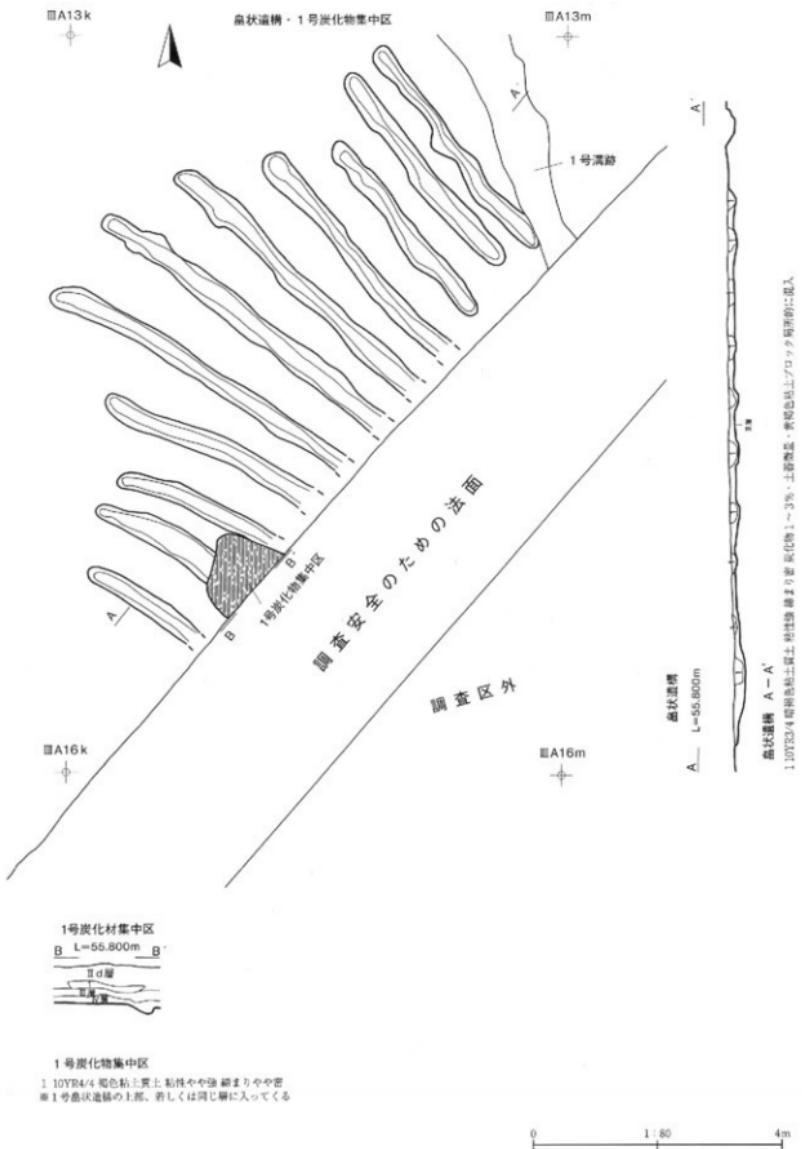
2号竪穴住居跡カマド a-a' - b-b'

- 1 10YR4/4 棕褐色粘土質シルト 粘性やや強 緩まりやや弱 土器少量混入 (約2・6層と振分けた土質)
- 2 10YR4/4 棕褐色粘土質砂質土 粘性やや強 緩まりやや弱 土器5%混入 (第3土は3層と色調が振分れる)
- 3 10YR3/4 棕褐色粘土質土 粘性やや強 緩まりやや弱 土器少量混入 (第3土は3層と色調が振分れる)
- 4 10YR3/4 棕褐色粘土質土 粘性やや強 緩まりやや弱 土器少量混入 (第3土は3層と色調が振分れる)
- 5 10YR4/4 硬土ブロック (洗成の良い洗土) 5%、炭化物2%混入 (並壁遺跡中に形成された洗土)
- 5 5YR4/4 に近い赤褐色粘土 粘性やや強 緩まり中 (並壁成良好、洗成部に伴う硬土)
- 6 10YR4/4 棕褐色粘土 粘性やや強 緩まりやや弱 土器一定量・炭化物2%混入
- 7 10YR4/4 棕褐色粘土 粘性やや強 緩まり弱 無機5%、炭化物1%混入 (並壁方の土)

2号竪穴住居跡カマド断面

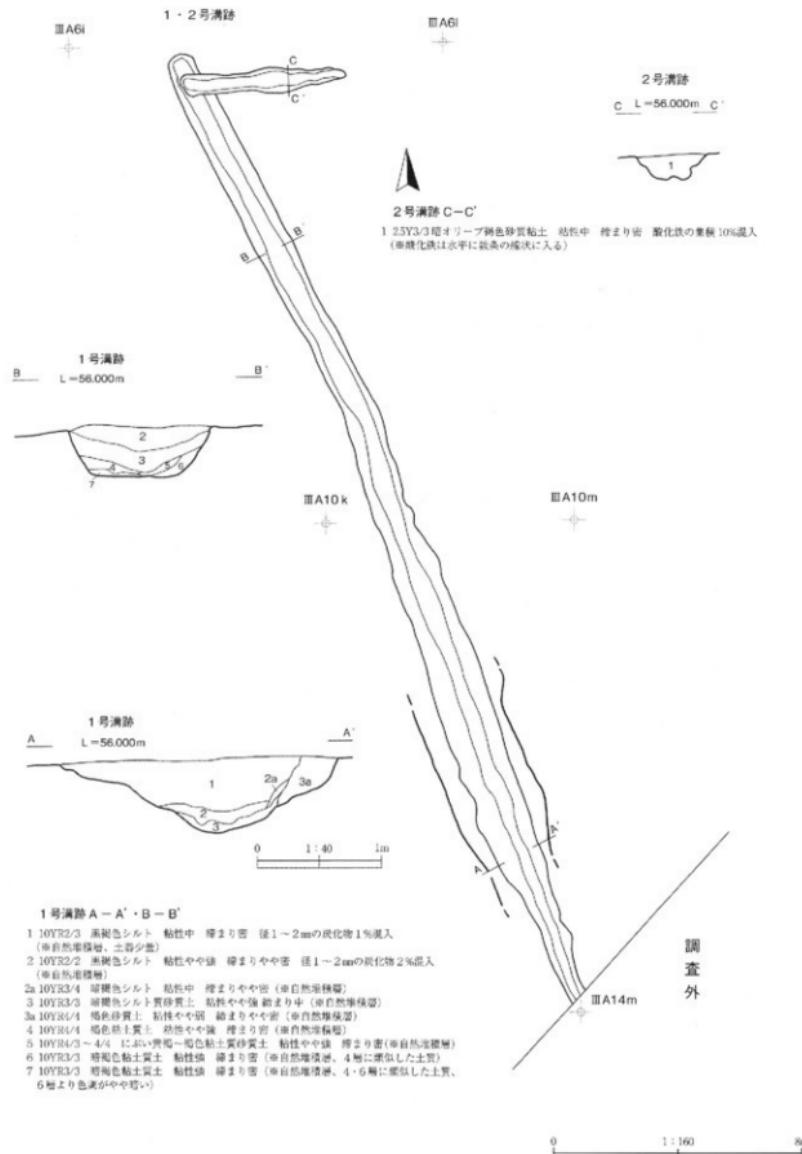


第5図 2号竪穴住居跡

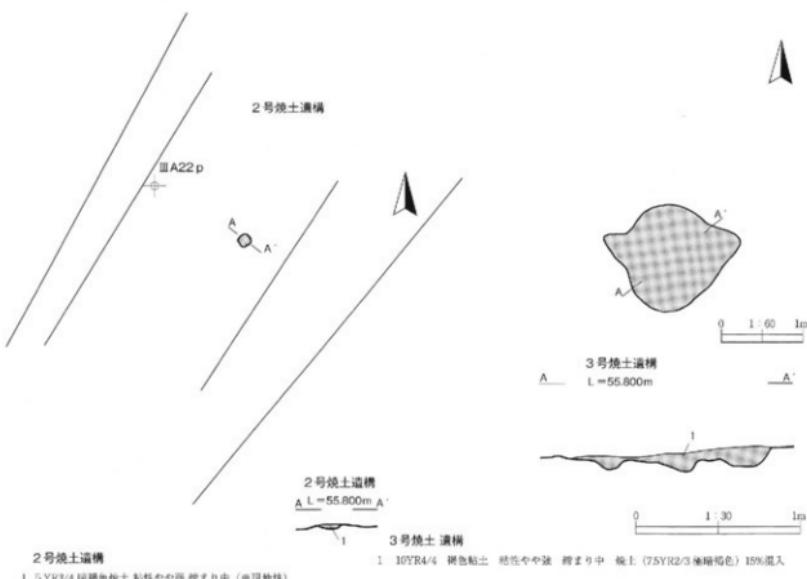
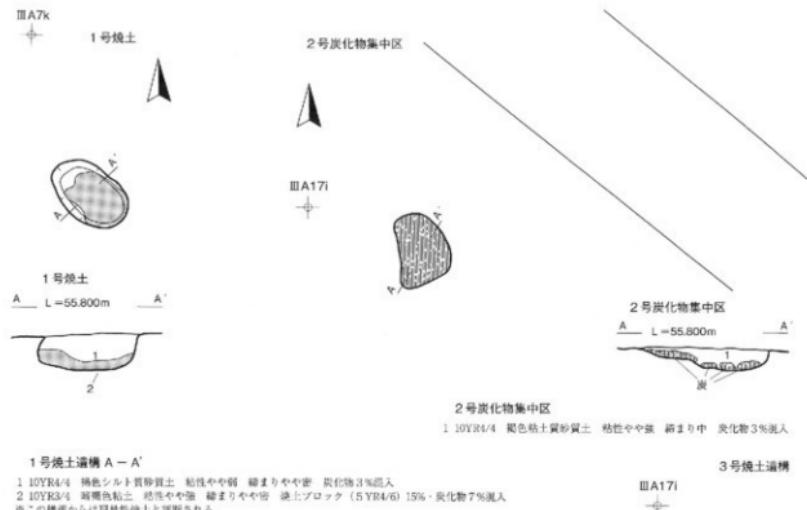


第6図 瓦状構造、1号炭化物集中区

(1) 立花南遺跡（北上市）

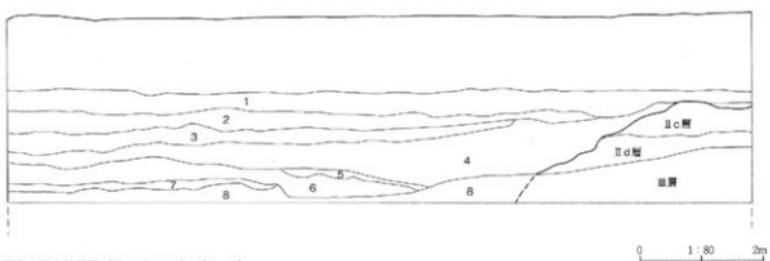
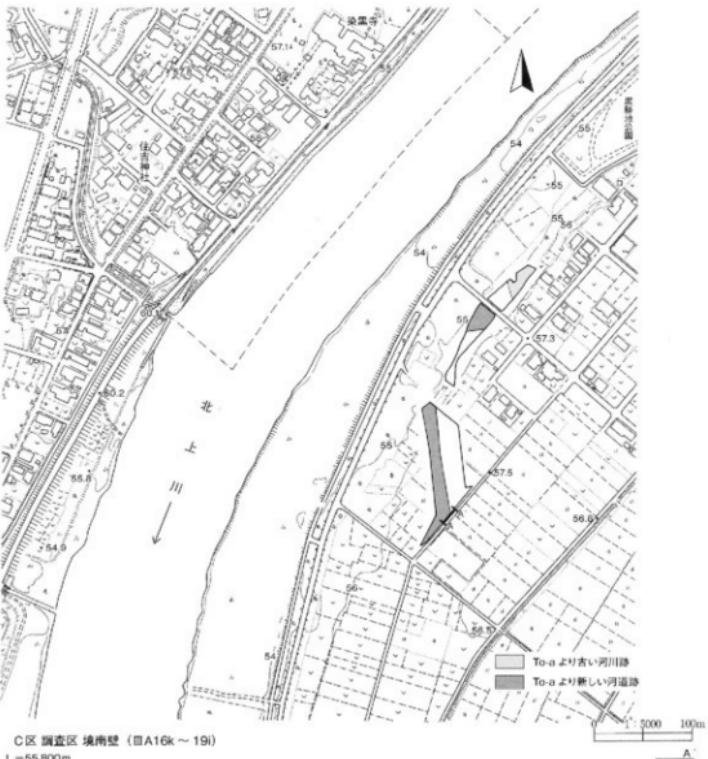


第7図 1・2号溝跡



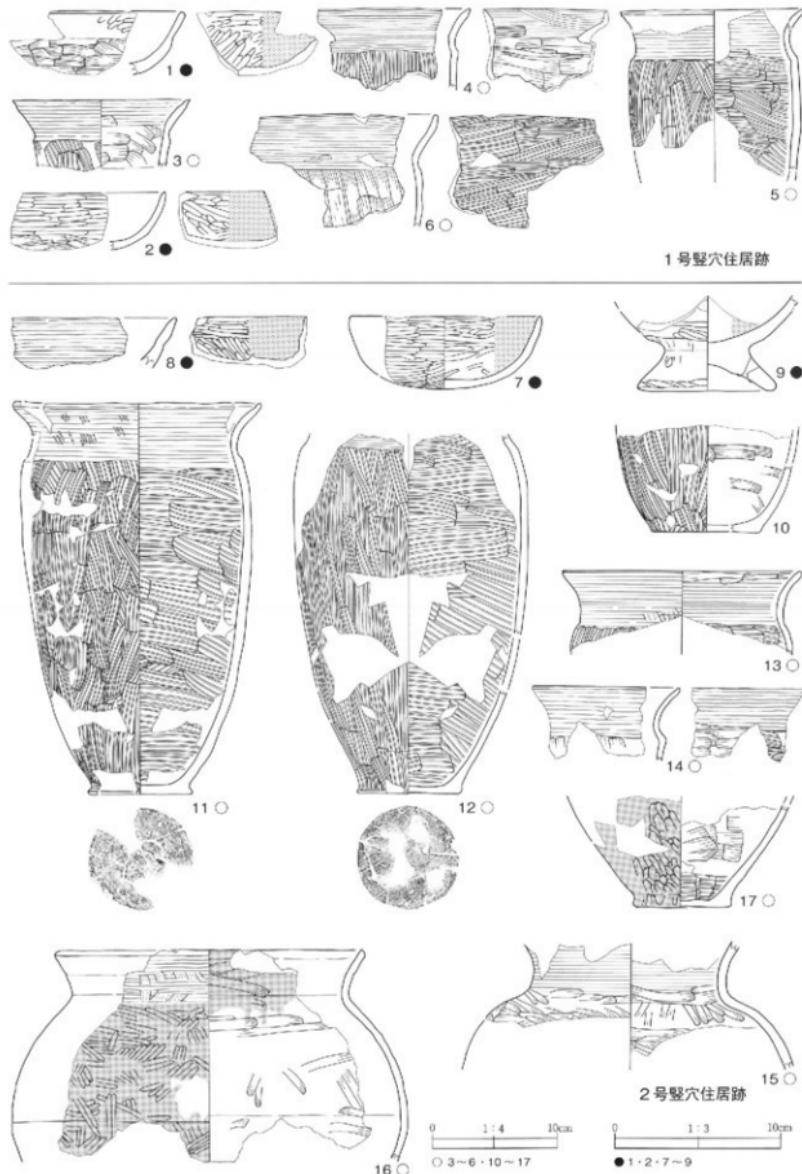
第8図 1～3号焼土遺構、2号炭化物集中区

(1) 立花南遺跡（北上市）



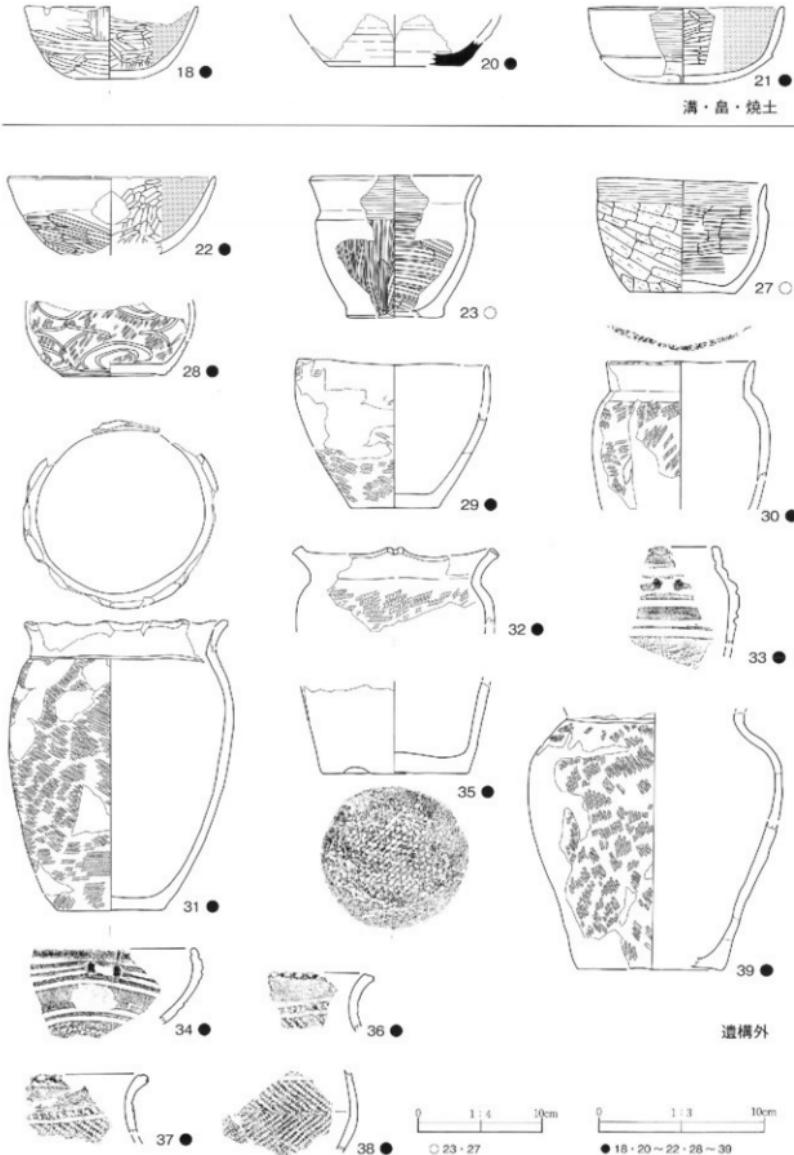
- 1 IOYR3/3 緑褐色粘土質シルト 粘性やや強 滲まりやや密 (※基本層序 II b層相当)
- 2 IOYR3/4 緑褐色砂質粘土 粘性やや強 滗まり中 (※II c層を利源とする土層と推定される)
- 3 IOYR3/3 緑褐色粘土質土 粘性やや強 滗まりやや密 液化度1%既入 (※II d層に類似する、あるいは同層を起源とする土層か?)
- 4 IOYR2/3 黒褐色粘土質泥質土 粘性強 滗まり密 砂質土5%・液化度1%既入 (※黒っぽく見える。旧河道路の横浜のキー層)
- 5 IOYR4/6 黒褐色砂質砂質土 粘性中 滗まりやや密
- 6 IOYR4/4 黒褐色砂質粘土質土 粘性やや強 滗まりやや密
- 7 IOYR4/4 黒褐色砂質土 粘性中 滗まりやや密
- 8 IOYR4/3 黒褐色砂質粘土質土 粘性やや強 滗まりやや密

第9図 1～3号旧河道路

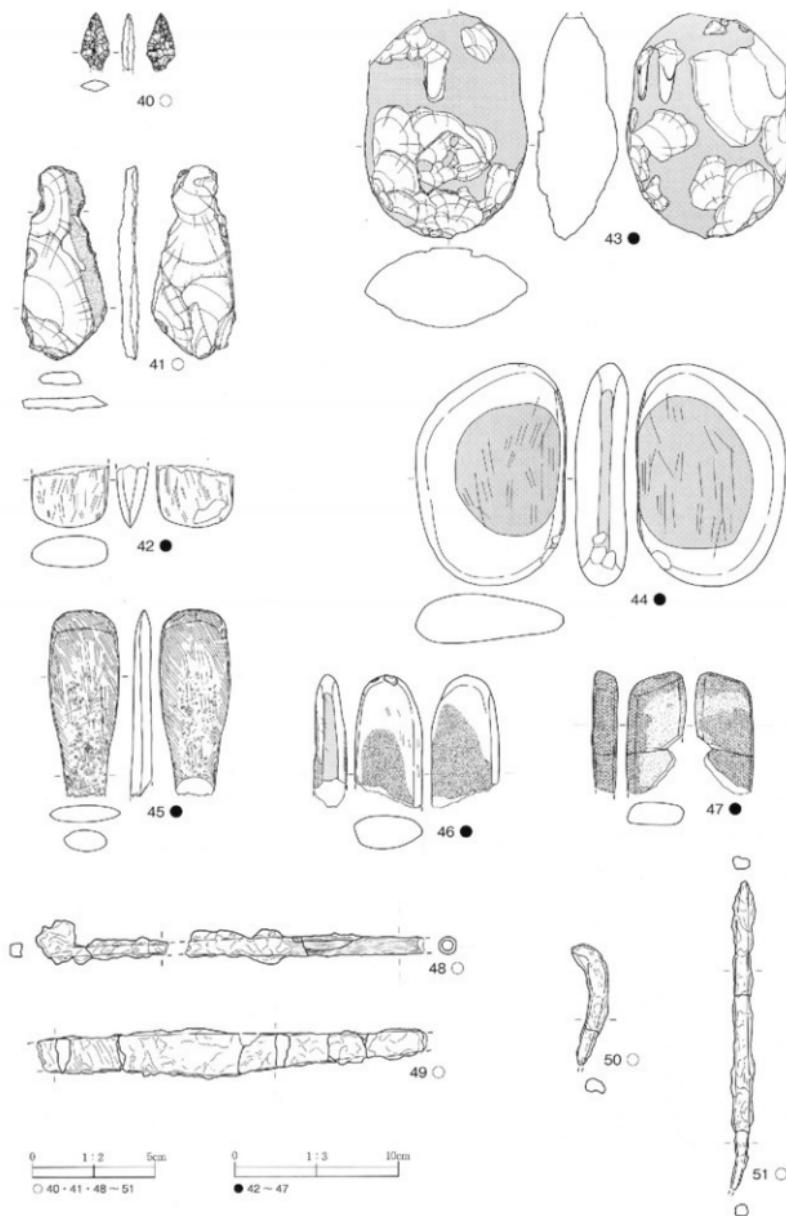


第10図 出土遺物 (1)

(1) 立花南遺跡（北上市）



第11図 出土遺物(土器)



第12図 出土遺物（石器類・鉄製品）

(1) 立花山遺跡（北上市）



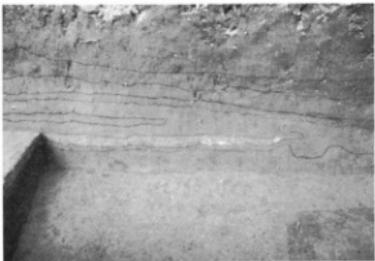
全景（下が南西）



遺跡全景（西から）



調査 A 区遠景（南から）



調査 A 区西境土層断面（東から）



調査 B 区全景（北から）



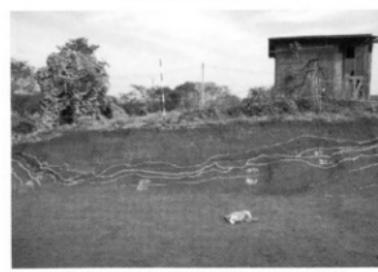
調査 B 区東境土層断面（西から）



調査 C 区（南から）



C 区基本層序（※第 12 トレンチ西から）



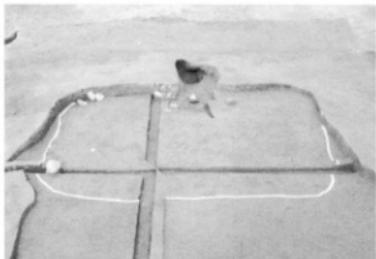
東端部土層断面（弥生土器集中出土西から）



調査 C 区調査前風景（東から）

写真図版 2 調査区遠景

(1) 立花南遺跡（北上市）



1号竪穴住居跡 完振平面（南から）



1号竪穴住居跡 埋土土層（南から）



1号竪穴住居跡 炭化材・焼土塊・土器出土状況（南から）



1号竪穴住居跡 カマド煙道部断面（東から）



2号竪穴住居跡 全景（南から）



2号竪穴住居跡 埋土断面（西から）



2号竪穴住居跡 カマド全景（南から）



2号竪穴住居跡 カマド断面（南から）

写真図版3 住居



畠状遺構全景（南から）



畠状遺構（南から）



1号溝跡 完掘全景（南）



1号溝跡 断面（南）



2号溝跡 完掘全景（西から）



2号溝跡 断面（西から）

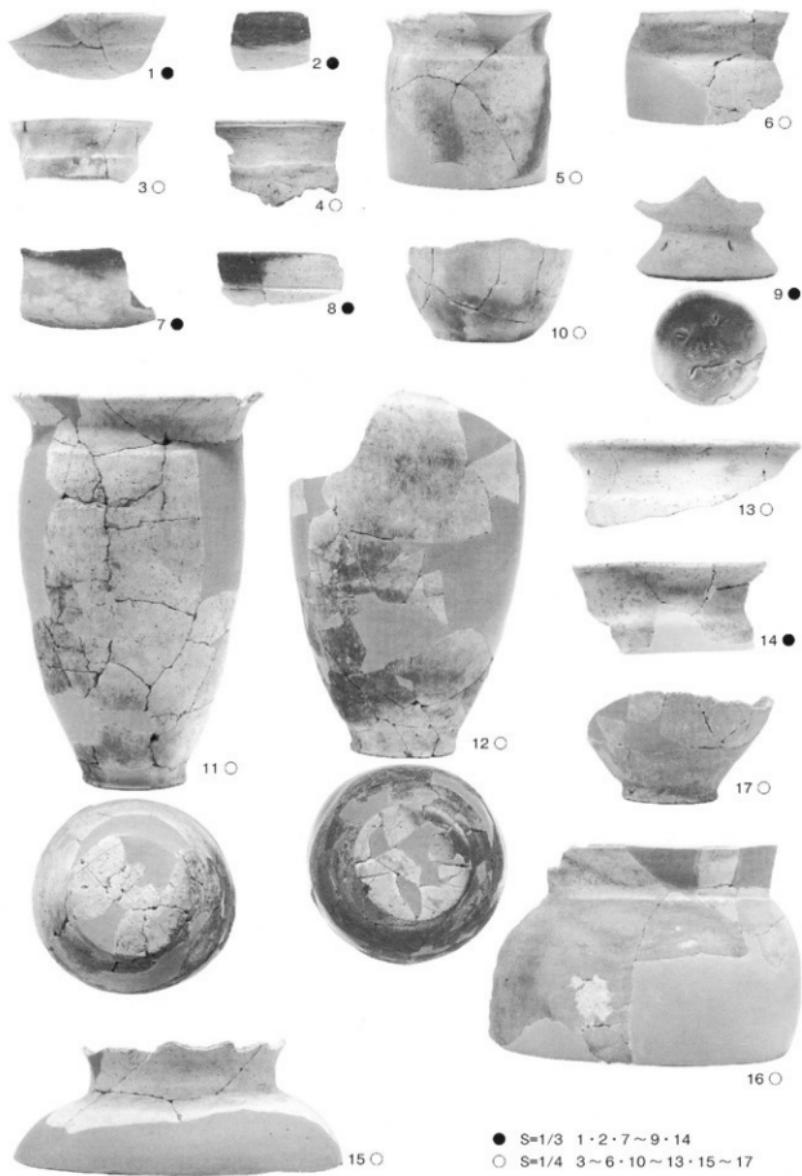


1号焼土遺構 断面（南から）

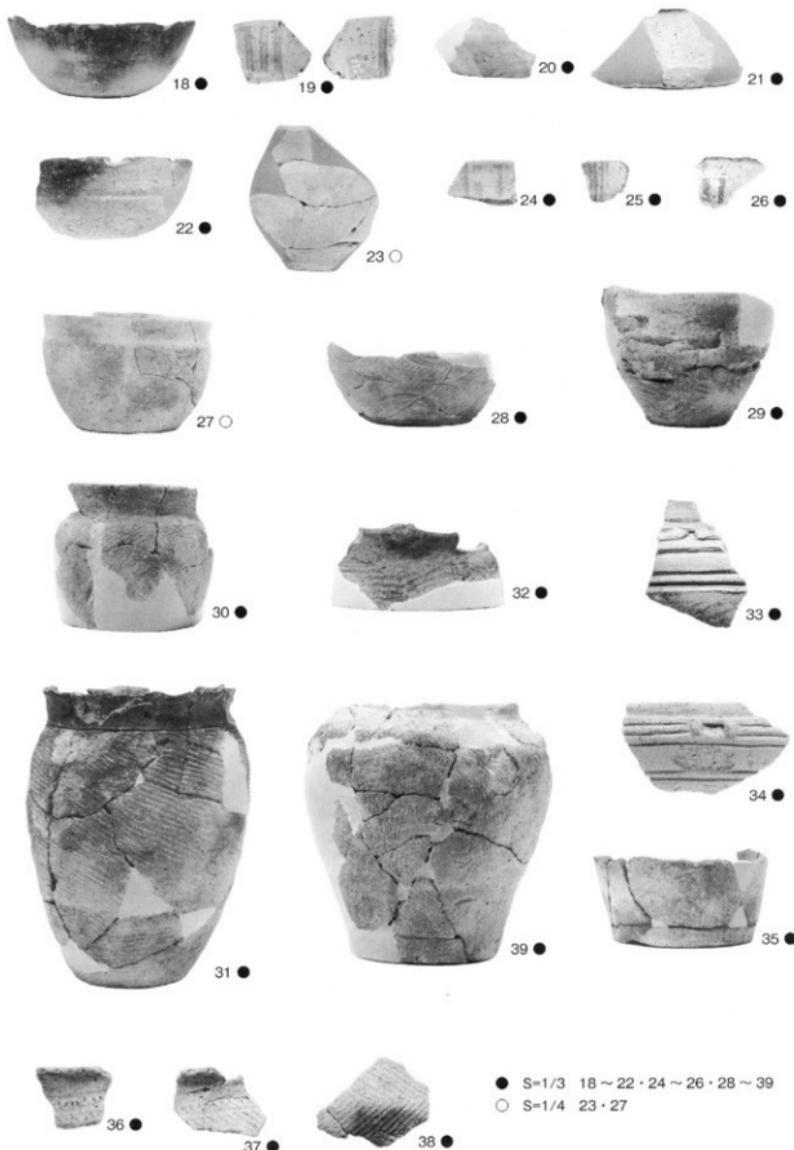


1号旧河道路 断面（北から）

写真図版4 畠・溝・その他



写真図版5 出土遺物（土器）



写真図版6 出土遺物（土器）

● S=1/3 18・21・29  
○ S=1/4 23・27

(1) 立花南遺跡（北上市）



焼成粘土 S=1/3

写真図版7 出土遺物（石器類・鉄製品・焼成粘土）

## (2) 熊の沢Ⅱ遺跡

所 在 地	遠野市綾織町新里27地割58-39地内ほか	遺跡コード・略号	MF54-0051-KN-II-10
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	641m <sup>2</sup>
事 業 名	東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業	調査終了面積	641m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成22年10月5日～10月15日	調査担当者	濱 浩二郎・西澤正晴

## 1 調査に至る経過

「上日影遺跡」および「熊の沢Ⅱ遺跡」は東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）の施工に伴って、その事業区内に存在することから発掘調査を実施することになったものである。東北横断自動車道は、釜石市を起点として、遠野市、奥州市を経由し、花巻市にて東北縦貫自動車道（東北道）に合流し、さらに分岐し、西和賀町、横手市、大仙市を経緯して秋田市に至る総延長212km（内岩手県内113kmで供用区間は45km。）の高規格道路である。

本路線は、釜石港・大船渡港といった重要港湾や觀光資源豊富な陸中海岸国立公園を有する三陸地方拠点都市地域と、先端技術産業の集積が著しい北上中部地方拠点都市地域等の岩手県内と秋田県を結び、周辺地域のみならず岩手・秋田両県全城の産業・経済発展を担うことを目的に平成10年度に遠野～宮守間で整備計画、宮守～東和間では施工命令が、平成15年には新直轄方式により整備することが決定している。

「上日影遺跡」および「熊の沢Ⅱ遺跡」については、本年度に岩手県教育委員会で試掘調査を実施され、当路線事業地内が埋蔵文化財包蔵地であることが確認されたものであり、その結果に基づいて岩手県教育委員会と国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所が協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることにした。

これにより財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターにおいて、「上日影遺跡」・「熊の沢Ⅱ遺跡」の発掘調査に着手した。

(国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所)

## 2 遺跡の位置と立地

熊の沢Ⅱ遺跡は遠野市役所から西南西約4.6kmの位置にあり、西から東へ流れる猿ヶ石川と南側に接する山林から続く丘陵の先端部に立地する。調査前の状況は山林で、標高は279m前後である。

## 3 基本層序

いずれも表土（黒褐色シルト）下は褐色土（10YR4/4）で、遺構検出面である。

## 4 調査の概要

## (1) 遺構

陥し穴状遺構が2基検出された。形状はいずれも溝状を呈し、規模は1号陥し穴が開口部径324×74cm、底径336×6cm、深さ114cm、2号陥し穴が開口部径290×56cm、底径286×9cm、深さ86cmで、遺構から遺物は出土していない。

## (2) 遺物

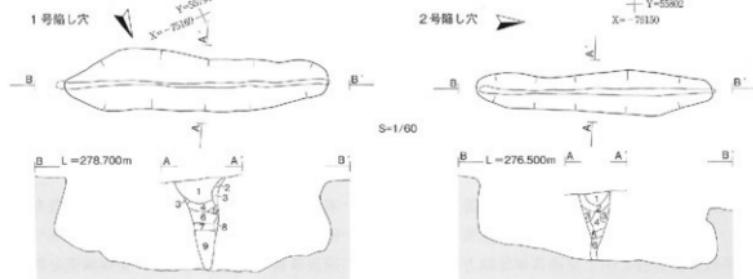
表土下の褐色土面から縄文土器の小破片が1点出土した。外面に貝殻文・沈線文が施されている。

## 5 まとめ

今回の調査で熊の沢Ⅱ遺跡は縄文時代の狩猟場であることが判明した。遺跡全体の詳細については

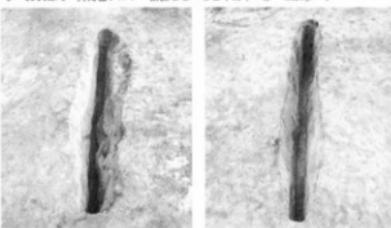
(2) 熊の沢II遺跡

今後の調査機会を待ちたい。なお、熊の沢II遺跡の平成22年度調査に関する報告はこれをもって全てとする。



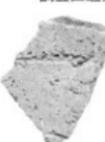
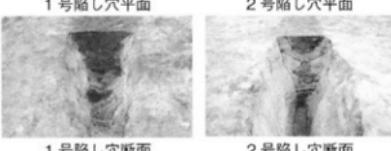
1号陷し穴  
A-A'

- 1 10YR2/1 黒褐色シルト 粘性・しまりあり
- 2 深緑色シルト 粘性・しまりあり
- 3 10YR3/2 黄褐色シルト 粘性・しまりあり 前緑色シルト(10YR3/4)5%含む。
- 4 10YR2/1 黑褐色シルト 粘性ややあり しまりあり
- 5 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性・しまりあり
- 6 10YR2/6 黄褐色シルト30%, 10YR3/4 黄褐色シルト20%の混合土層 粘性・しまりあり
- 7 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性なし しまりありややあり
- 8 10YR3/2 黄褐色砂質シルト 粘性なし しまりややあり ジョウ塵許多。
- 9 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性なし しまりあり ジョウ塵多い。



2号陷し穴  
A-A'

- 1 10YR2/2 開褐色シルト 粘性・しまりあり
- 2 10YR2/2 深褐色シルト70%, 10YR4/4 黄褐色シルト30%の混合土層。粘性あり
- 3 10YR4/6 暗褐色シルト 粘性・しまりあり
- 4 10YR3/2 黄褐色シルト 粘性・しまりややあり
- 5 10YR6/6 黄褐色砂質シルト 粘性なし しまりあり
- 6 10YR3/2 黑褐色シルト 粘性あり しまりややあり



写真図版

(3) 上日影遺跡  
かみひかけ

所 在 地	遠野市綾織町新里22地割45-3地内ほか	遺跡コード・略号	MF30-0285・KIIK-10
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	1,450m <sup>2</sup>
事 業 名	東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業	調査終了面積	1,450m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成22年9月17日～10月15日	調査担当者	浦 浩二郎・西澤正晴

### 1 遺跡の位置と立地

上日影遺跡は遠野市役所から西南西約4.1kmの位置にあり、西から東へ流れる猿ヶ石川と南側に接する丘陵部の先端に立地する。調査前の状況は山林で、標高は286～289mである。

### 3 基本層序

調査区は南東から北西に向かって傾斜しており、丘陵の上部から流入した土砂が北側ほど厚く堆積している。

### 4 調査の概要

#### (1) 遺構

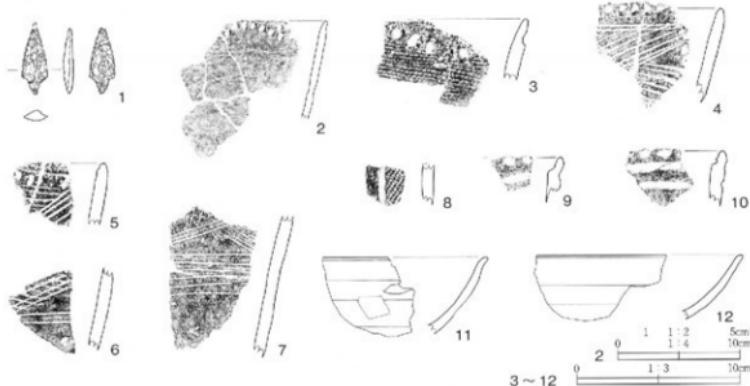
古代の焼土遺構1基、時期不明の柱穴状土坑1個を検出した。焼土遺構は82×51cmの範囲に焼上がり広がっており、焼土から土師器壊の破片が2点出土した。柱穴状土坑は焼土遺構の南側で検出され、径44×40cm、深さ7cmで埋土に焼土を含む。出土遺物はなく、時期は不明である。

#### (2) 遺物

小コンテナで1箱分出土した。1は石器で先端部を欠く。石材には北上山地産の頁岩が使用されている。2～7は縄文時代早期の深鉢の口縁～胴部破片で、口縁部には幅広の刺突文(2・3)、平行・斜行の沈線文(4～7)、貝殻腹縁压痕文(7)などの文様が施されている。9・10は縄文時代晩期の鉢の口縁部破片である。11・12は1号焼土内から出土したロクロ成形による土師器壊の破片である。

### 5 まとめ

今回の調査で、上日影遺跡は縄文時代・古代の遺物散布地であることが分かった。古代の焼土遺構からは土師器が少量出土したことから、近隣に集落が存在する可能性が考えられるが、今回調査した範囲では詳細は不明である。なお、上日影遺跡22年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。

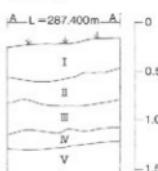




1号焼土  
A-A'

1. EYR2/2 明赤褐色洗土 粘性・しまりややあり 黒褐色シルト (10YR2/1) 20%混入。砂粒を多量含む。
2. 10YR6/6 橙赤色土 粘性なし しまりあり 約5mmの炭化物片1%未満含む。

## 基本土層



## 基本土層

- I 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性ややあり しまりあり
- II 10YR2/1 黒褐色シルト 粘性・しまりあり 3-5cmの塊3-5%含む。
- III 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性・しまりあり 3-5cmの塊3-5%含む。
- IV 10YR3/3 暗褐色シルト 50%の混合土壤。粘性・しまりあり 3-5cmの塊5-7%含む。
- V 10YR4/6 暗褐色シルト 粘性・しまりあり 黑褐色(大) 混入。



## (4) 高殿II遺跡

所 在 地	奥州市前沢区古城字高殿 60番地6ほか	遺跡コード・諸号	N E 46-1301・K D-10
委 託 者	県南広域振興局農政部農村整備室	調査対象面積	677m <sup>2</sup>
事 業 名	経営体育成基盤整備事業古城2期地区	調査終了面積	677m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成22年5月6日～6月1日	調査担当者	杉沢昭太郎・米田 寛

### 1 調査に至る経過

高殿II遺跡は、「経営体育成基盤整備事業古城2期地区」のほ場整備に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

本地区は奥州市前沢区中心部より北東部に位置し、現況は、小区画・不整形な水田で、かつ幅員狭小な農道となっていることから、作業効率が悪く、また用排水兼用の土側溝水路のため、用水不足や排水不良となっており、維持管理に支障を来しているところである。このため、本事業地区においては、大区画ほ場整備を実施することで、農作業の効率化、生産コストの削減、生産性の向上を図り、農地集積による安定した経営体および担い手農家の育成を目的として、事業着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、県南広域振興局農政部農村整備室から平成21年8月28日付け「県南広農整第136-2号『経営体育成基盤整備事業古城2期地区における埋蔵文化財試掘調査について(依頼)』」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。依頼を受けた岩手県教育委員会は平成21年9月24日に試掘調査を実施し、工事に着手するには当該遺跡の発掘調査が必要になる旨を、平成21年10月20日付け教生第929号「埋蔵文化財の試掘調査について(回答)」により回答があった。この回答を受け、当農村整備室は平成22年9月24日付け「県南広農整第136-8号『埋蔵文化財試掘調査結果による工法協議について』」により、盛土工法による保存箇所と、発掘調査による記録保存箇所について協議を行った。その結果を踏まえて当農村整備室は、岩手県教育委員会の調整を受けて、平成22年4月1日付けで財團法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(岩手県県南広域振興局農政部農村整備室)



第1図 遺跡位置図

## 2 遺跡の位置と立地

本遺跡は奥州市前沢区北部の古城地区にあり、北上川西岸の水沢高位段丘に立地する。この段丘は胆沢扇状地の低位段丘面に相当し、中位段丘面（胆沢段丘）までは西に25km程ある。遺跡とその周辺は概ね平坦で、現在は水田が多くを占め微高地には集落や畠地が点在している。標高は31mである。

## 3 基本層序

- I層 暗褐色土層。表土・耕作土。層厚 20~30cm。
- II層 黒色土層。旧表土。遺跡東側のみに見られる。0~30cm。
- III層 黒褐色土層。部分的に見られる。0~10cm。
- IV層 黄褐色土。遺構検出面。場所によってはその下の疊層が見られる。層厚は不明。

## 4 調査の概要

本遺跡は南北210m、東西110mの広がりを有するが、その中で今回は遺跡の南端部を調査したことになる。

### (1) 遺構

#### <土坑>

調査区の北側にややまとまって分布しているもの、その他の場所に点在するものに大きく分けられる。前者の中には焼土粒・炭粒・土器器細片を多く含む土坑が複数見られた。5・10・11・13~15号土坑がそれに対応し、不要なものを埋めた平安時代の施設と考えられる。調査区が遺跡の縁辺部に相当すること、堅穴住居跡が見られないことなどから、集落の中の居住域からやや外れた場所にあたると推察される。個々の土坑については第1表に整理した。

第1表 土坑観察表

( )は残存値

遺構名	重複関係	検出面での計測値(cm)			埋土	出土遺物	時期	備考
		長さ	幅	深さ				
1号土坑	1号窯より古い。	106	(92)	24	人為堆積	粘土塊 0.1袋、炭化穀子	近世	近世の穀連屋敷の痕であろう。
2号土坑	1号窯、3号土坑との関係は不明。5号土坑より古い。	(125)	(100)	10	人為堆積	土器器坏片 1、壺片 1、須恵器坏片 1	平安時代	
3号土坑	1号窯より古い。2号土坑との関係は不明。	(86)	(85)	23	人為堆積	須恵器坏片 1、土器器片 12、測定片 2	不明	
4号土坑	2号窯より古い。	102	90	26	人為堆積	須恵器坏片 2、土器器片 1、土塊 1、炭粒系片 0.2袋、粘土塊 1、炭粒	平安時代か	
5号土坑	2・9号土坑より新。1号窯より古い。	(100)	(90)	32	人為堆積	須恵器壺片 1、坏片 1、土器器片 1、壺片 1、須恵器系片 0.5袋、粘土塊 1	平安時代	破片が大きい。土器器片した土坑か。壺は2~3個体分のようだ。
6号土坑	1号窯より古い。	75	70	22	人為堆積	土器器壺片 3片	不明	
7号土坑	8号土坑との関係は不明。	79	74	30	人為堆積	須恵器坏片 2、須恵器片 3	平安時代か	
8号土坑	7号土坑との関係は不明。	81	67	42	人為堆積	須恵器坏片 1、土器器片 1、須恵器系片 0.1袋	平安時代か	



第2図 地形図

9号土坑	1号窯、5号土坑より古い。7号窯より新しい可能性あり。	(140)	93	22	人為堆積	土師器壺片8片	平安時代	
10号土坑	なし。	96	(50)	25	人為堆積	須恵器環片1、蓋片? 1、土師器環片1、壺片13、須恵器環片18、粘土塊3、灰粒	平安時代	須恵器環は4個体分ある。焼窯土坑か。
11号土坑	1号窯より古い。4号窯との關係は不明。	(68)	64	30	人為堆積	須恵器壺片1、土師器環片4、壺片14、粘土塊11、灰粒	平安時代	焼窯土坑か。
12号土坑	なし。	120	72	13	人為堆積	須恵器小甕類片1、土師器片5	不明	
13号土坑	なし。	58	52	31	人為堆積	須恵器壺片1、甕類片2、土師器甕片1袋、須恵器杯片1、粘土塊0.3袋、灰粒	平安時代	焼窯土坑か。 1号窯と同一遺構。
14号土坑	1号窯より古い。	58	(32)	31	人為堆積	須恵器壺片1、土師器甕片0.2袋、土師器杯片2	平安時代	焼窯土坑か。
15号土坑	なし。	(112)	68	22	人為堆積	土師器環片0.1袋・甕片0.2袋、粘土塊0.2袋	平安時代	焼窯土坑か。
16号土坑	1号窯より古い。	122	(53)	43	人為堆積	須恵器壺片3、土師器片0.1袋	不明	
17号土坑	なし。	91	89	42		上が人為、下が自然地積か	不明	

## &lt;堀跡・溝跡&gt;

東-西方向に延びている近世の堀跡・溝跡、概ね南-北方向に延びている平安時代とみられる溝跡がある。前者は残りが良いのに対して、後者は浅く土坑類に切られたりしてて残りが悪い。

1号堀跡はこの地域に広く見られる環濠屋敷の堀跡と思われるが、詳細な時期を判断する遺物を欠く。しかし、逆にこのことから本遺構が近世の中でも陶磁器などの出土量が非常に少ない17世紀初頭頃に遡る可能性もある。環濠の全域については周辺地形の改変が著しく手掛かりに乏しいが、古い航空写真から1辺が凡そ30m四方となるのではないかと推測される。

第2表 堀・溝觀察表

遺跡名	重複関係	方向	横断面での剖面値(m)			出土遺物	時期	備考
			長さ	幅	深さ			
1号窯 土坑より新。	2・3・5・9・11・14号	南-北 西-東	4 10	2.68	0.45	須恵器片0.2袋、土師器・須恵器15袋、粘土塊0.1袋、石混? 1、剝片1	近世	岸越した箇所のみ。粘土塊は11号土坑出土の粘土塊とよく似ている。
1号窯	1・16号土坑より新。	西-東	49	0.94	0.29	須恵器片1袋、土師器・須恵器2袋、石混? 4袋、石混1・礫石1、近世剝片1	近世	摩耗した箇所のみ
2号溝	4号土坑より新。	西-東	19	0.4	0.1	須恵器片2袋、高台環片1、土師器片0.2袋	近世か	8cの高台環か
3号溝		西北西-東南東	6.5	0.19	0.13	須恵器片3袋、土師器片9、甕片2	平安時代か	
4号溝	11号土坑との關係不明。	北西-南東	4	0.12	0.1	須恵器片2袋、甕片1	平安時代か	
5号溝		南-北	6.5	0.65	0.19	須恵器片2袋、甕片1、須恵器環片2袋	平安時代か	
6号溝		南-北	4	0.32	0.1	土師器片1袋、須恵器片6袋	平安時代か	
7号溝	9号土坑より古い可能性あり。	南-北	3	0.38	0.13		平安時代	

(4) 高殿II遺跡

<掘立柱建物跡・柱穴>

調査区のはば中央に1号掘立柱建物跡がある。桁行き2間、梁間2間の総柱建物であるが、かなり歪な柱配置をしている。四隅にくる柱穴4個に対して、そうではない柱穴4個がかなり内側に入っている。柱間寸法にも統一感がないが、P45・P51・P54が直線的に結べることから東西方向を梁間、南北方向を桁行きと考えた。平面形態から倉庫と見られる。

第3表 柱穴観察表

単位：cm

No.	規模	深さ	その他	No.	規模	深さ	その他
1	37	35	17.7	38	49	41	33.7
2	32	24	8.1	39	24	20	27.9
3	29	22	7.5	40	27	26	22.3
4	41	31	21.5	41	49	22	11.8
5	57	45	23.2	42	34	27	24.5
6	62	55	40.4	43	29	25	16.4
7	90	85	50.2	44	35	35	38.3
			須恵器壊片1、土師器、須恵系片10	45	48	45	32.2
8	57	48	36	46	25	21	15.6
9	59	39	45.1	47	29	22	9.7
10	33	32	35.8	48	21	25	12.5
11	42	31	6.3	49	25	21	19.0
12	52	45	26.5	50	39	29	10.9
13	36	28	28.8	51	39	31	24.4
14	28	25	30.5	52	40	36	30.9
15	24	24	16.6	53	45	45	35.3
16	25	19	11.4	54	39	33	24.6
17	31	28	19.1	55	28	19	9.2
18	22	16	19.4	56	31	22	18.8
19	32	30	41.9	57	35	30	11.1
			須恵器壊片2	58	25	21	21.5
20	38	30	37.1	59	24	19	14.6
21	31	22	13.2	60	30	(25)	7.5
22	35	31	13.4	61	25	27	8.2
23	28	21	9.2	62	29	27	13.6
24	22	21	10.3	63	60	41	5.4
25	26	22	34.2	64	66	(30)	21.5
26	21	15	6.5	65	37	37	36.6
27	30	25	16.5	66	25	24	8.6
28	25	24	18.9	67	30	25	11.8
29	33	31	26.1	68	27	23	11.5
30	31	28	19.7	69	28	22	8.0
31	32	26	14.0	70	45	30	4.6
32	25	25	13.5	71	35	(18)	11.5
33	31	28	22.9	72	33	(18)	26.4
34	27	19	9.4	73	44	39	34.1
35	45	42	39.4	74	45	29	25.7
36	20	19	20.0				
37	33	23	36.3				

(2) 遺物

土師器・須恵器・須恵系土器片が中コンテナで2箱出土した。石器類は8点、焼けた粘土塊が中コンテナ0.3箱出土している。土師器・須恵器・須恵系土器は10世紀前半を中心のようであるが、破片が多く詳細は不明である。粘土塊については、欠け口が風化して磨滅している。廃棄土坑としているものからよく出土している。粘土中にコマイの痕跡は認められないと、壁の表面の平坦な面が見られないことから礫土に使われたものではないと考えた。加えてかなりの纖維が入っていることから、土器をつくる粘土ではないようだ。以上のことからカマドの壊れたものではないかと推察される。

13号土坑出土炭化物を輪加速器研究所に依頼し年代測定を行った。その分析結果を記す。

13号土坑埋土出土炭化物1の<sup>14</sup>C年代は $1150 \pm 30$ yrBPである。暦年較正年代(1σ)は830～967cal ADの間に3つの範囲で示される。

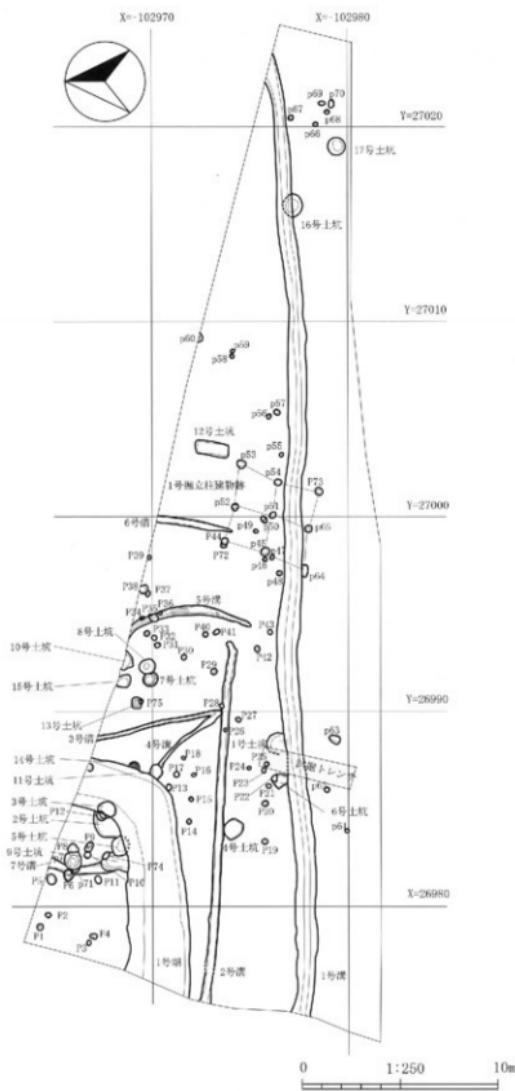
測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$6^{\text{14C}}$ (%)	6 $^{\text{14C}}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC(%)
IAAA-102633	1	遺構：13号土坑 層位：縄土	炭化物	AAA	-24.81 ± 0.63	1,150 ± 30	86.67 ± 0.31
試料の炭素含有率は70%を越える十分な値で、化学処理・測定上の問題は認められない。							
[#4069]		6 $^{\text{14C}}$ 補正なし		曆年校正用 (yrBP)		1 σ 年代範囲	
測定番号		Age(yrBP)		pMC(%)		2 σ 年代範囲	
IAAA-102633	1,150 ± 30	86.67 ± 0.29	1,149 ± 28	868cal/AD-902cal/AD(25.8%)	830cal/AD-837cal/AD(3.6%)	780cal/AD-792cal/AD(3.8%)	916cal/AD-967cal/AD(38.9%)
[参考値]							

第4表 土器類・須恵器観察表

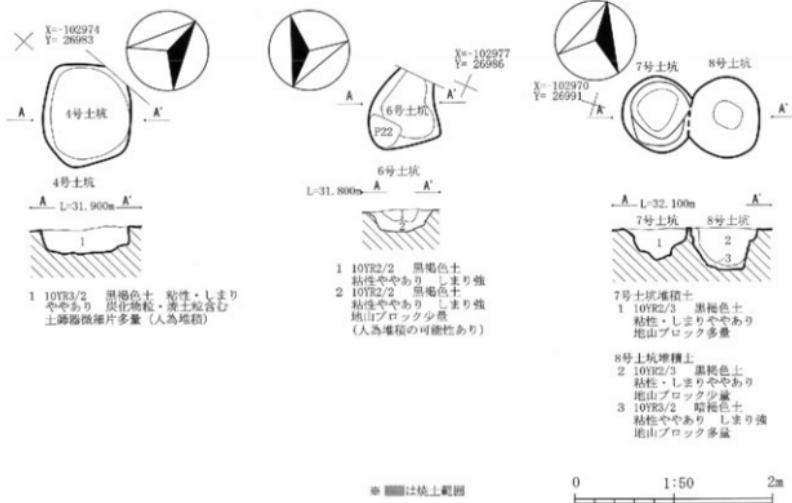
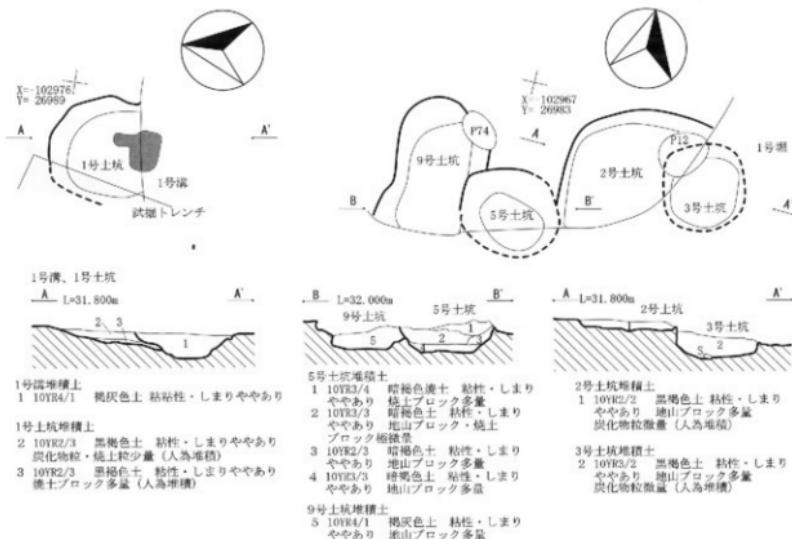
番号	出土地点	種別・器種・部位	外面の特徴	内面の特徴	その他
1	5号土坑埋土	土器器・甕・口縁から胴部	体部にハケメ、粘土貼付	ハケメ	素クロ
2	10号土坑埋土	須恵器・甕・口縁	ロクロナデ	ロクロナデ	
3	11号土坑埋土	上簡容・甕・口縁	ロクロナデ	黒色処理・ミガキ	
4	13号土坑埋土	須恵器・甕・口縁	ロクロナデ	ロクロナデ	外腹に浅い沈線
5	15号土坑埋土	須恵器・甕・口縁から底面	ロクロナデ	ロクロナデ	
6	13号土坑埋土	土器器・小甕・口縁から底部	粗いハラナデ	粗いハケメ	
7	14号土坑埋土	土器器・甕・口縁から胴部	口縁部ヨコナデ・胴部の調整は不明。	ヘラナデ	
8	5号 sond	須恵器・甕・口縁から底面	ロクロナデ	ロクロナデ	
9	5号 sond	土器器・甕・口縁から胴部	ヘラナデ	ヘラナデか	ロクロ
10	5号 sond	土器器・甕・口縁から胴部	ロクロナデ・ヘラナデ	ヘラナデか	
11	5号 sond	土器器・甕・口縁	ロクロナデ	黒色処理・ミガキ	
12	5号 sond	須恵器・甕・口縁から底面	ロクロナデ	ロクロナデ	
13	10号土坑埋土	須恵器・大甕・胴部	タタキ	タタキ	
14	1号 sond	須恵器・大甕・胴部	タタキ	タタキ	
15	1号 sond	須恵器・甕・胴部	ロクロナデ	ロクロナデ	
16	1号 sond	須恵器・甕・胴部	タタキ		
17	13号土坑埋土	須恵器・甕・胴部	タタキ		

## 5まとめ

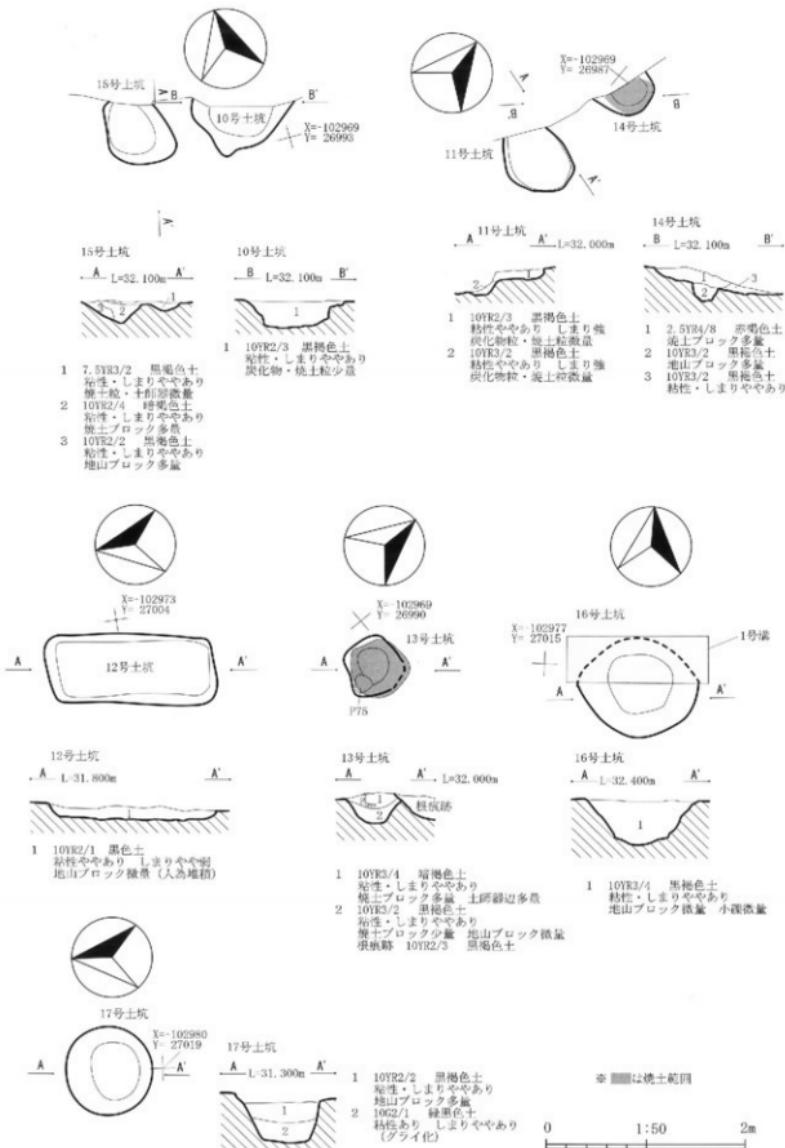
高殿II遺跡の今回の調査区は遺跡の南東端にあたる。ここには主に平安時代の遺構・遺物と近世と見られる遺構が分布していた。平安時代では土坑・溝・掘立柱建物跡があり、土坑は土器片や粘土塊等を焼土・炭粒などと共に廃棄するためのものであった。掘立柱建物跡も柱間寸法にばらつきの目立つものであるため、食櫛以外のものを保管する施設の可能性がある。近世と見られる遺構には堀跡がある。これはこの地域の特色といえる環濠屋敷の堀跡と考えられるが、遺構に伴う遺物がなく詳細な時期は不明である。なお、高殿II遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。



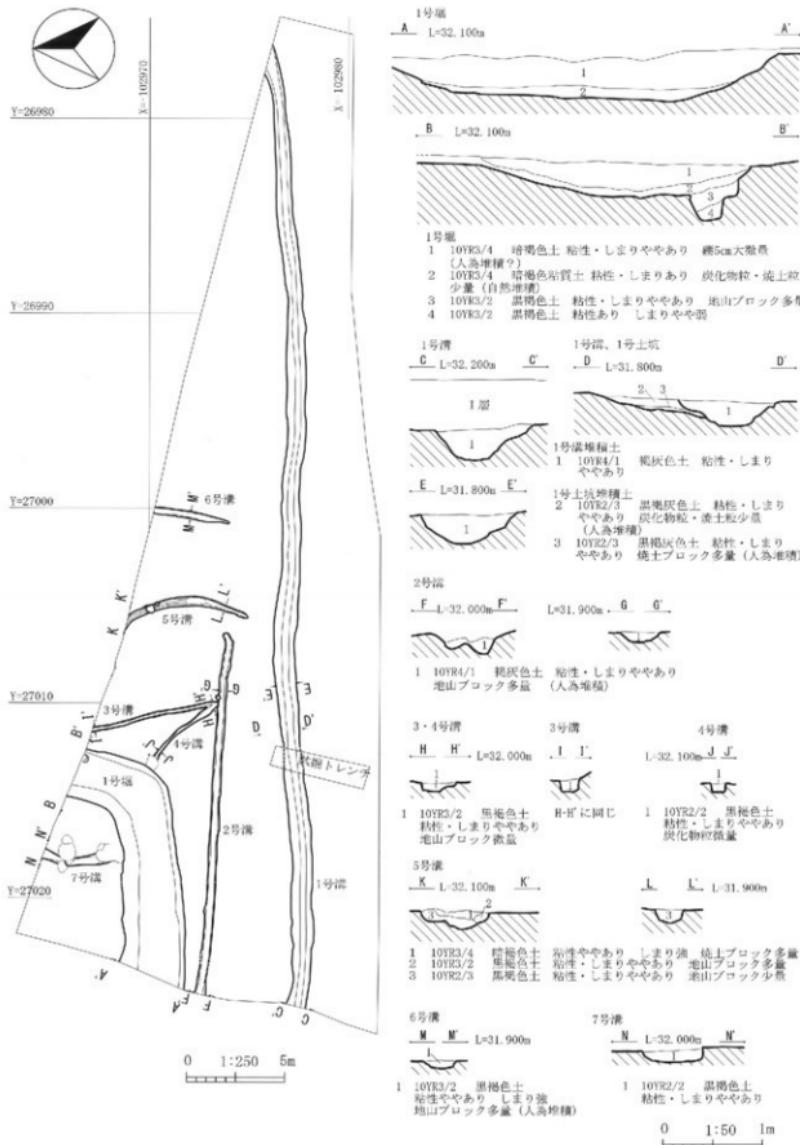
第3図 高殿II遺跡遺構配置図



第4図 1～9号土坑



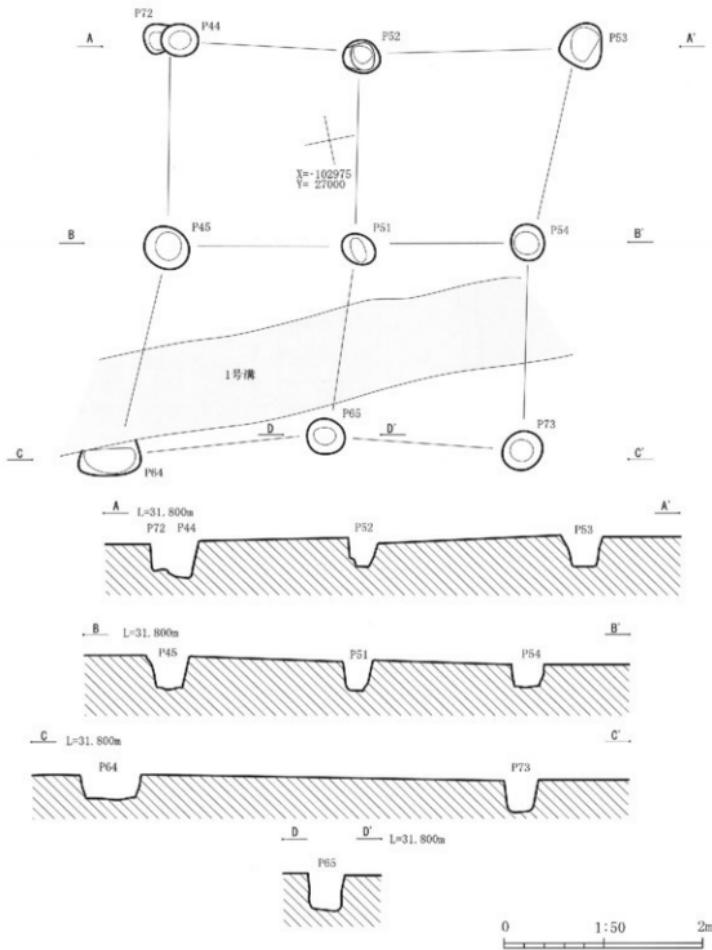
第5図 10～17号土坑



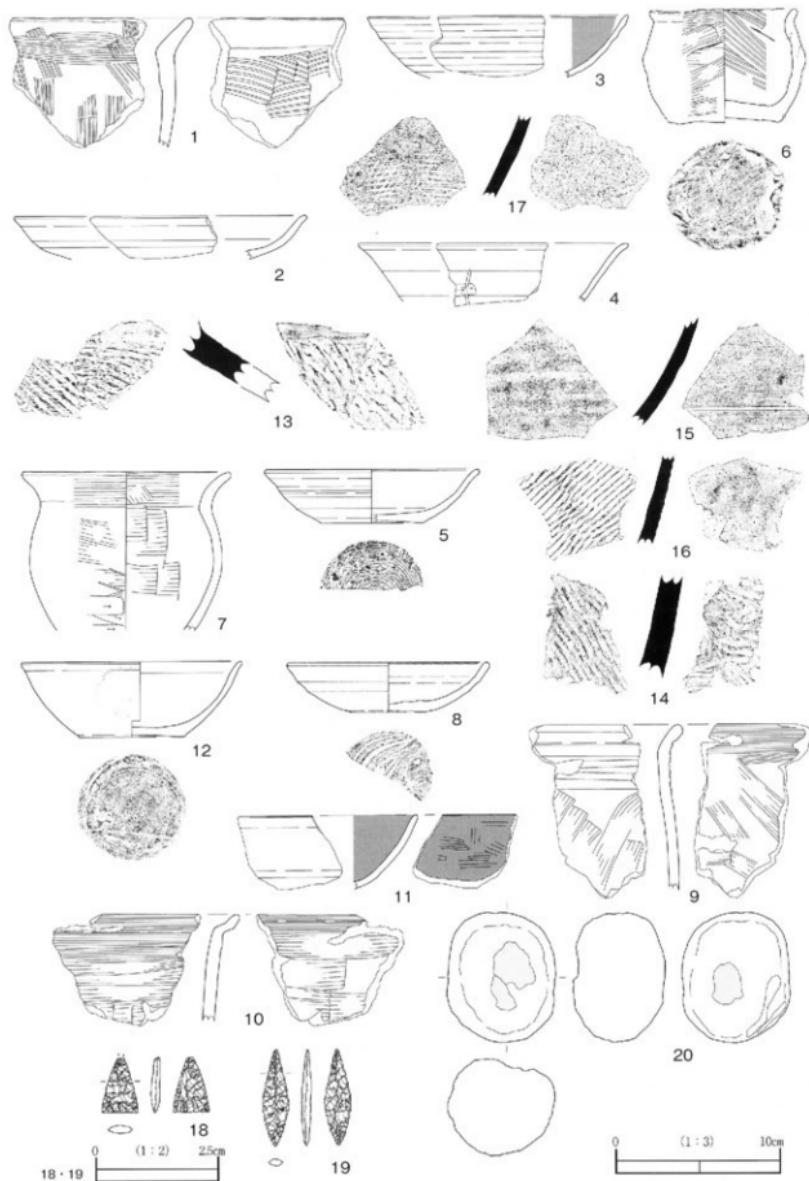
第6図 1号坑、1～7号溝



1号掘立柱建物跡



第7図 1号掘立柱建物跡



第8図 出土遺物

(4) 高殿II遺跡



遺跡遠景（南東から）



遺跡近景（南から）  
調査区は遺跡の南端にある。



調査区近景、1号溝跡ほか  
(西から)

写真図版1 遺跡遠景ほか



1号土坑平面（南から）



1号土坑・1号溝断面（西から）



2・3号土坑平面（南から）



2号土坑断面（南から）



3号土坑断面（南から）



4号土坑平面（南から）



4号土坑断面（南から）



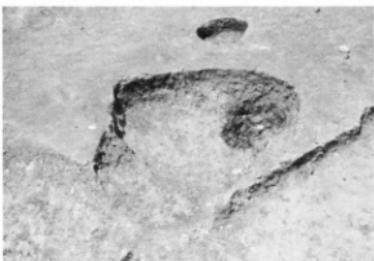
5号土坑平面（南から）

写真図版2 土坑（1）、溝（1）

(4) 高殿Ⅱ遺跡



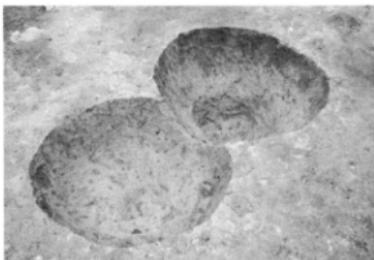
5・9号土坑断面（南から）



6号土坑平面（南から）



6号土坑断面（北西から）



7・8号土坑平面（南から）



7・8号土坑断面（南から）



5・9号土坑平面（北から）



10号土坑断面（南から）

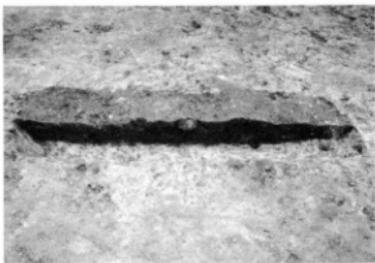


11号土坑断面（南から）

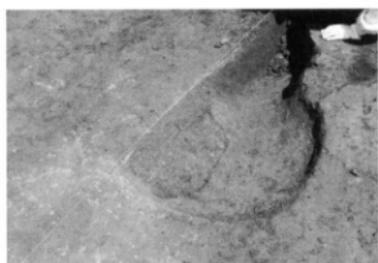
写真図版3 土坑（2）



12号土坑平面（西から）



12号土坑断面（西から）



13号土坑（南東から）



13号土坑断面（南東から）



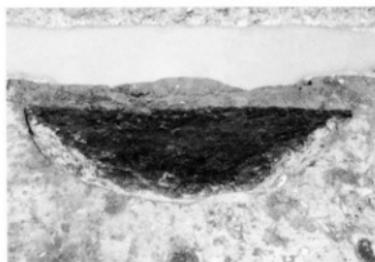
14号土坑平面（西から）



14号土坑断面（西から）

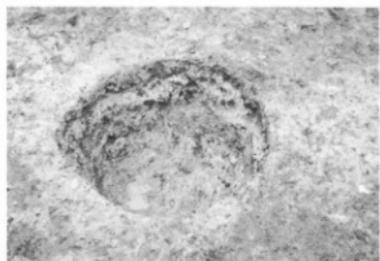


15号土坑平面（西から）



15号土坑断面（西から）

(4) 高殿II道路



17号土坑平面（南から）



17号土坑断面（西から）



1号堀平面（西から）



1号堀断面（東から）



3・4号溝断面（南東から）



5号溝断面（南から）



6号溝断面（南から）



2号溝断面（東から）



3・4号溝平面（北から）



5号溝平面（北から）



7号溝断面（南から）



6号溝平面（北から）

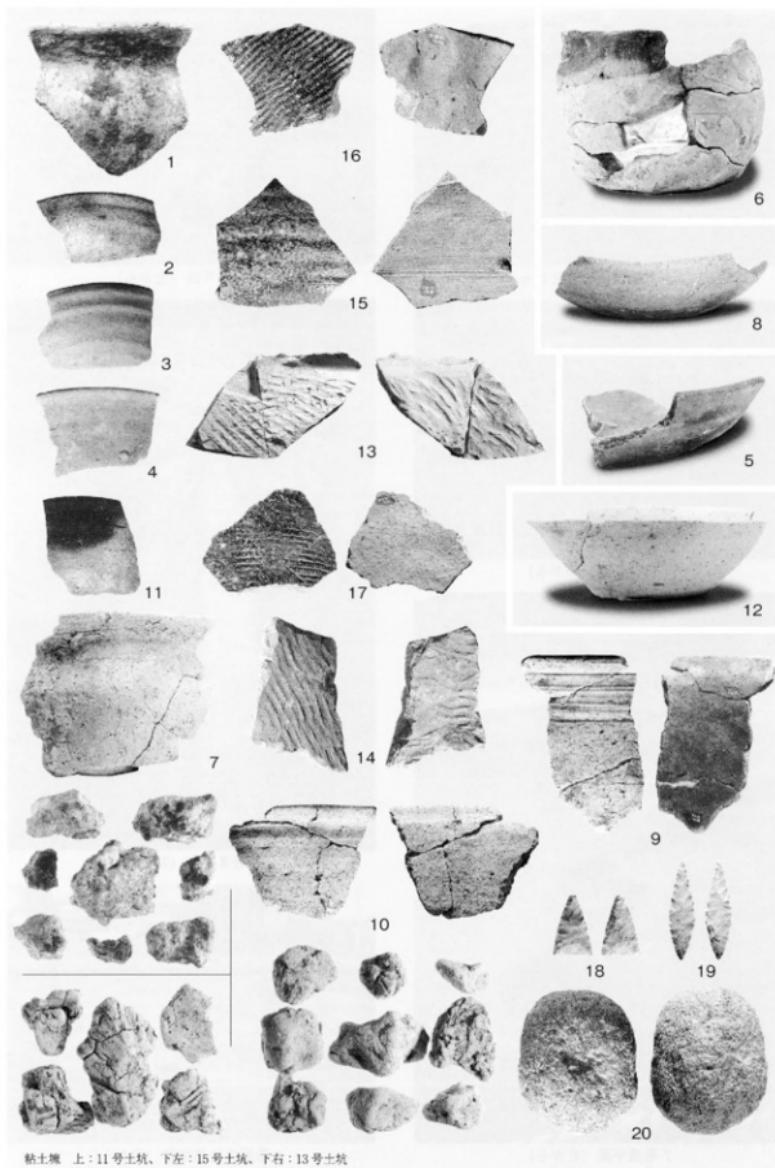


7号溝平面（北から）



1号掘立柱建物跡（南から）

写真図版6 溝（3）、掘立柱建物跡



粘土壤 上：11号土坑、下左：15号土坑。下右：13号土坑

写真図版7 出土遺物

## II 発掘調査概報

凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ :  $42 \times 32 \times 30\text{cm}$

中コンテナ :  $42 \times 32 \times 20\text{cm}$

小コンテナ :  $42 \times 32 \times 10\text{cm}$

## (5) 芋田沢田IV遺跡 第2次調査

所 在 地：盛岡市玉山区芋田字沢田4-10ほか  
 委 託 者：国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所  
 事 業 名：一般国道4号渋民バイパス  
 発掘調査期間：平成22年5月6日～8月31日  
 調査終了面積：1,280m<sup>2</sup>  
 調査担当者 村上 拓・北村忠昭  
 主要な時代 縄文



## 遺跡の立地

IGRいわて銀河鉄道好摩駅の東方約10km、北上川左岸の河岸段丘上に立地する。南北縁を段丘崖と沢に区切られた、西側に張り出す舌状の高台である。標高は214m前後。要調査範囲3,630m<sup>2</sup>のうち昨年度未了分2,380m<sup>2</sup>が対象で、今次1,280m<sup>2</sup>を終了した。未了区は次年度以降継続調査の予定。

## 調査の概要

今次調査では縄文時代早期～前期初頭・中期末葉～後期前葉の堅穴住居跡31棟、住居状遺構18棟、炉跡26基、陥り穴状遺構3基、土坑66基、柱穴330個、立石1基、土器埋設遺構4基、遺物包含層600m<sup>2</sup>等が検出された。これらのうちの一部は未精査であり次年度以降に再着手する。出土遺物は縄文土器大コンテナ11箱（早期中葉・後期初頭を中心）、石器大コンテナ13箱、土製品数点等である。

後期遺構面では、昨年度検出した環状配石遺構の下部を追加調査し、南側張り出し部の中心から楕円形墓壙を検出、石鏡の副葬が確認された。また環状配石の南北軸北端の礫の下位から埋設された小形鉢形土器が出土した。土器内部と掘り方には小礫及び砂が充填される。いずれも配石遺構本体との関係が濃厚とみられる。また、配石遺構と同時期と目される、黄色土敷き均しを伴う4本柱遺構が弧状に並んで検出された。昨年度來検出した黄色土集中地點や他の4本柱遺構を加えると、環状に分布する様子が看取される。同様の環状分布傾向は、フラスコ状土坑（墓壙に転用？）にも認められる。

早期の遺構面では、楕円形と略方形の住居跡が密に重複した状態で検出された。出土土器から早期中葉を中心とみられるが、個別の時期についてはさらに検討を要する。このうち楕円形の住居の一部では、壁の外周（或いは壁上端付近）に橢形（擂鉢形）の柱穴、床面壁際にも小ピットが巡る2重の柱穴配置が確認された。断面観察から壁柱は住居中心に向け内傾していた可能性が高いとみられる。



環状配石遺構下の墓壙



縄文時代早期の住居群

## (6) 芋田沢田VI遺跡

所 在 地：盛岡市玉山区芋田字沢田 63-6 ほか  
委 託 者：国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所  
事 業 名：一般国道4号渋民バイパス  
発掘調査期間：平成22年4月5日～5月11日  
調査終了面積：553m<sup>2</sup>  
調査担当者 北村忠昭・村上 拓  
主要な時代 縄文・古代・中世・近世



### 遺跡の立地

IGRいわて銀河鉄道好摩駅の東約1.2kmに位置し、姫神山から延びる小起伏山地の縁辺部、西向き斜面上に立地する。標高は203m前後で、調査前の現況は原野である。

### 調査の概要

今回の調査では縄文時代の陥し穴状遺構1基、土坑1基、柱穴状土坑43個、平安時代の畠跡1ヶ所(約20m<sup>2</sup>)、中世の堀跡1条、中世～近世のカマド状遺構3基、柱穴状土坑23個、時期不明の溝跡2条が検出された。出土遺物は縄文土器小コソナ0.5箱、石器3点、須恵器1点、近世磁器1点である。遺跡の南西端に位置する今回の調査区は、縄文時代から近世まで断続的に利用されており、その中心となるのは狩猟場と利用された縄文時代と城館もしくは屋敷として利用された中世～近世の2時期である。



北側調査区全景（上が北）



南側調査区全景（上が東）



縄文時代の陥し穴状遺構

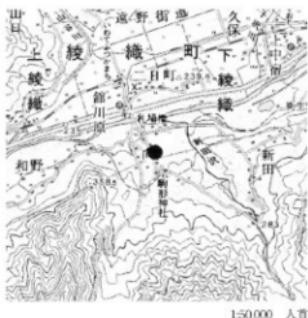


中世の堀跡

(7) 向<sup>むかい</sup>Ⅲ遺跡 第2次調査

所 在 地：遠野市綾織町下綾織第31地割102ほか  
委 託 者：国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所  
事 業 名：東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業  
発掘調査期間：平成22年4月8日～7月2日

調査終了面積：7,213m<sup>2</sup>  
調査担当者 福島正和・羽柴直人  
主要な時代 繪文・古代・中世



遺跡の立地

向Ⅲ遺跡は、JR釜石線二日町駅の南1.5kmに位置し、東から西へと流れる猿ヶ石川南岸の河岸段丘に位置する。遺跡は南から北へ緩やかに下る地形で、同時に調査区東端は沢地形となっている。昨年度の1次調査では遺跡西半を対象とし、今年度は遺跡東半を対象とした。調査前の状況は、調査区全面が水田として利用されており、周囲も水田に囲まれている。この水田の造成によって、微高地部分は削平され、微低地部分は盛上がなされる地形改変がなされていた。

## 調査の概要

今回の調査で検出した遺構は、縄文時代と考えられる陥れ穴状遺構17基・土坑4基、平安時代の堅穴住居跡3棟、中世と考えられる堅穴建物跡1棟・掘立柱建物跡14棟、時期不明の土坑15基である。出土した主な遺物は、縄文土器大コンテナ15箱、古代の土器0.5箱、中コンテナ0.5箱である。その他、砥石とみられる石製品3点、近世以降の陶磁器片が若干量出土している。

時代を追って遺跡を概観すると、縄文時代は狩猟活動域として利用されていたと考えられる。詳細な時期は、陥し穴より出土する遺物が皆無であるため不明である。陥し穴以外の土坑から出土した縄文土器は、早期末～前期初頭のものがみられ、調査区周辺にこの時期の居住域が存在することを示唆している。

平安時代および中世には、居住域の一端として利用されたようである。平安時代の堅穴住跡は、3棟とも方形の平面形態を呈し、1棟は焼失した状況が看取できた。出土した古代の土器は、大半が土器師である。中世の掘立柱建物跡は、時期を特定する遺物を欠いているものの、中世と考えられる堅穴建物跡が近在することや遺構の特徴から中世の所産であると推測される。



### 堅穴住居疊岩化材検出作業（南から）



掘立柱建物跡全景（西から）

## (8) 尾肝要 I 遺跡

所 在 地：下閉伊郡田野畠村沼袋 65 番地ほか  
委 託 者：国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所  
事 業 名：三陸北縦貫道路尾肝要道路  
発掘調査期間：平成 22 年 4 月 8 日～7 月 15 日  
調査終了面積：5,300m<sup>2</sup>  
調査担当者 丸山直美・北田 眞・滝浩二郎・西澤正晴  
主要な時代 縄文・近世



### 遺跡の立地

本遺跡は田野畠村役場の西北西4.1kmに位置し、北流する姫松川左岸の北東向き緩斜面上に立地する。遺跡の標高は232～237m、調査前の現況は宅地および畑地である。

### 調査の概要

検出された遺構は、中世から近世にかけての工房跡 1 棟、近世の掘立柱建物跡 5 棟、礎石建物跡 1 棟、平場 2 箇所、井戸跡 2 基、土坑 4 基、墓壙 1 基、小柱穴 154 個、近代の炭窯跡 1 基である。遺物は大コンテナで 1 箱分出土しており、内訳は、縄文土器、石器、陶磁器、鉄製品、古錢、鉄滓、羽口等が各少量である。

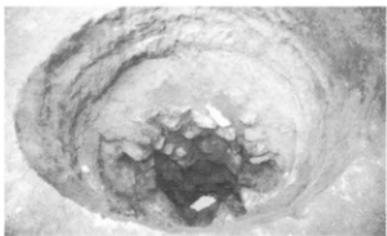
調査の結果、北端部からは鉄生産に関する工房跡が検出されており、当時の生業を知りうる資料が得られた。北側からは寛永通寶を伴う掘立柱建物や井戸等が検出され、居住城としての利用がなされていた事が判明した。



近世の掘立柱建物跡（北から）



近世の礎石建物跡（東から）



近世の井戸跡（西から）



近代の炭窯跡（北東から）

## (9) 姫松 I・II 遺跡

所 在 地：下閉伊郡田野畠村沼袋 72・69 番地ほか  
 委 託 者：国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所  
 事 業 名：三陸北縦貫道路尾肝要道路  
 発掘調査期間：平成 22 年 4 月 8 日～7 月 15 日  
 調査終了面積：姫松 I 3,000m<sup>2</sup>・姫松 II 2,400m<sup>2</sup>  
 調査担当者：濱田 宏・北田 熟・菅野 梢  
 主要な時代：縄文



## 遺跡の立地

姫松 I・II 遺跡は田野畠村役場の西北西約 4 km の姫松川沿いに位置し、高森山から延びる小起伏山地の縁辺部、南東向き緩斜面に立地する。標高は 237～241m、調査前の状況は山林・荒地である。これと併行して調査した尾肝要 I 遺跡とは後者の北西側で隣接する。

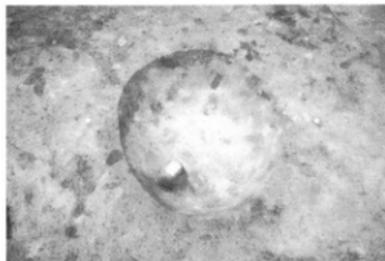
## 調査の概要

二つの遺跡の境界は調査区中央部の埋没沢付近にあるが、あまり明瞭でない。ともに表土下深さ 1 m 前後に、縄文時代前期中ごろの降下と言われる十和田中摺テフラの二次堆積層が観察され、その厚さは最大で 50cm に及んだ。姫松 II 遺跡では、このテフラ下の黒色土層から表裏に縄目をもつ土器片が 1 点出土している。

姫松 I 遺跡の検出遺構は、縄文時代の土坑 7 基、近世に属する掘立柱建物跡 1 棟、柱穴列 2 列、柱穴状土坑 73 個である。土坑の遺構確認面は、すべて先のテフラよりも下層であることから、縄文時代前期を含むそれ以前の上坑群と考えられる。なお、姫松 II 遺跡からは遺構は検出されなかった。

姫松 I 遺跡の出土遺物は、柱穴から出土した寛永通寶 16 枚のほか、縄文土器 5 点、石鎌 1 点、石器剥片 1 点、クルミと思われる炭化種子 4 点である。姫松 II 遺跡では、既述した縄文条痕文系土器のはかもう 1 点の縄文土器片と石器剥片が 2 点出土した。

遺跡周辺では、予てから近世・近代の鉄山跡の存在が言られており、今回検出した建物跡や柱列、柱穴状土坑の一部がそれに関連する遺構の可能性がある。



縄文時代前期以前の土坑



テフラの堆積状況

## (10) 大平野Ⅱ遺跡

所 在 地：奥州市胆沢区若柳字大平野1-1ほか  
委 託 者：国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所  
事 業 名：胆沢ダム建設事業（大平野地区）  
発掘調査期間：平成22年4月12日～9月30日  
調査終了面積：7,300m<sup>2</sup>  
調査担当者 川又 晋・小林弘卓  
主要な時代 繩文



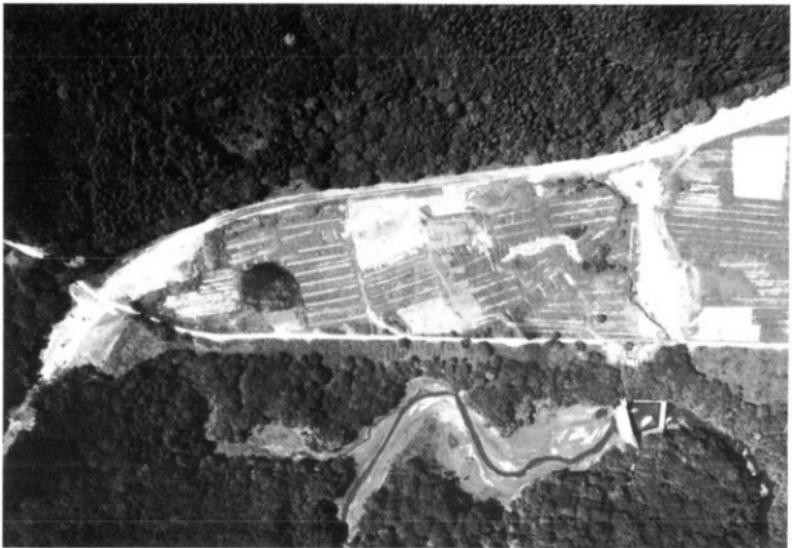
### 遺跡の立地

大平野Ⅱ遺跡は、奥州市役所胆沢総合支所の南西約18kmに位置する。胆沢川の支流、前川左岸の段丘上に立地し、標高は360m前後である。今年度は5年目の調査で、遺跡範囲の西侧部分を調査した。

### 調査の概要

検出した遺構は、縄文時代の堅穴住居跡1棟、土坑33基、柱穴状土坑21個、焼土3基、土器埋設遺構1基である。堅穴住居跡は、複式炉を持つ。

出土した遺物は、縄文土器（早期・中期・後期・晩期）大コンテナ4箱、石鋤27点、石匙26点、石錐7点、削・搔器49点、打製石斧1点、台石4点、石皿3点、磨石1点、凹石9点である。遺物は、遺構外出土の割合が多い。



## (11) 小屋野遺跡 第2次調査

所 在 地：盛岡市川目第5地割 122-82 ほか  
 委 託 者：盛岡広域振興局土木部梁川ダム建設事務所  
 事 業 名：梁川ダム建設事業  
 発掘調査期間：平成22年7月20日～11月17日  
 調査終了面積：6,030m<sup>2</sup>  
 調査担当者 濱田 宏・丸山直美・菅野 梢  
 主要な時代 繩文



## 遺跡の立地

本遺跡は盛岡市の東方、JR 盛岡駅の南東約9.2kmに位置し、梁川左岸の河岸段丘上および丘陵から延びる小規模な扇状地内に立地する。標高は190～215m、調査前の状況は山林である。今年度は、昨年末となつた2,920m<sup>2</sup>を含む6,030m<sup>2</sup>の第二次調査を実施した。

## 調査の概要

昨年度の調査成果から、遺構は調査区北東部の緩斜面に存在するものと予想されたが、その比較的狭い範囲に縄文時代後期中葉から後葉を主体とする集落跡が確認された。

検出遺構は、縄文時代後期の竪穴住居跡7棟、晚期1棟、土器埋設遺構1基、炉跡2基、土坑45基、陥し穴状遺構3基、焼土遺構22基、柱穴状土坑82個、集石5箇所である。遺構検出面はほとんどが最終面の褐色土層で、晚期の竪穴住居跡だけはそれよりも上位の黒褐色土層中で検出している。土坑には、貯蔵用と思われるフラスコ形土坑や、内部に礫を伴う墓壙の可能性があるものなども含まれる。集石に関しては、いずれも扇状地の扇尖部で検出されたものであるが、そのほとんどが角礫であることから人為的に配されたものではない可能性がある。

出土遺物は、遺構の時期と同じ縄文時代後期中葉から後葉を主体とし、中期後半から晩期中葉までの土器がみられる。出土量は土器大コンテナ24箱、石器同4箱、土偶1点、円盤状土製品1点、土玉2点、ミニチュア土器10点などで、土器に比べ全体的に石器が少ない傾向が認められた。

今後は、同じ川目地区にある川目A・川目C遺跡、戸仲遺跡などとの関連について、遺構・遺物の両面から考察していきたい。



拡張された縄文時代後期の竪穴住居跡



土坑内の出土土器

## (12) 高畠遺跡

所 在 地：紫波郡矢巾町大字下矢次第4地割151番地ほか

委 託 者：盛岡広域振興局農政部農村整備室

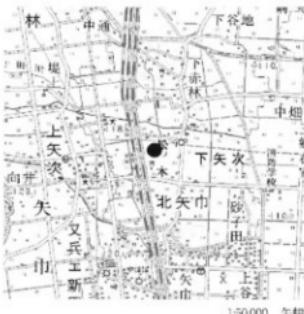
事 業 名：経営体育成基盤事業下矢次地区

発掘調査期間：平成22年5月6日～7月2日

調査終了面積：2,980m<sup>2</sup>（本調査2,460m<sup>2</sup>、確認調査520m<sup>2</sup>）

調査担当者：浦 浩二郎・西澤正晴

主要な時代：縄文・古代・近世



### 遺跡の立地

高畠遺跡は矢巾町役場の北約2.1kmに位置し、岩崎川によって開析された砂礫段丘上の微高地に立地する。標高は114～116m、調査前の状況は農道・水田・畑地等である。

### 調査の概要

調査区は南北4箇所に分かれる。北端の調査区では遺構・遺物は確認されなかったが、それ以外の調査区では縄文時代～近世までの遺構・遺物が確認されている。

検出遺構は、古代が土坑12基、溝1条、近世が掘立柱建物跡3棟、墓塚12基、溝3条、柱穴状土坑15個である。その他に時期不明の溝1条、土坑2基が見つかっている。

出土遺物は、縄文土器、土師器、須恵器が大コンテナで2箱、近世以降の陶磁器が小コンテナで1箱、墓塚からは古銭41点、煙管の吸口1点、鉄製品1点、他に釘等が出土している。今回の調査で、縄文・古代・近世以降の遺構・遺物が確認され、古来より、断続的に生活の場として利用されていたことが判明した。古代の土器は9世紀前半代を中心とするもので、本遺跡から南東の位置にある徳丹城との関連が考えられる。近世末～近代は溝・掘立柱建物跡・墓塚があり、居住に利用された場所であったことが判明した。



調査区全景



9世紀前半代の溝



近世の掘立柱建物跡

(13) 石崎貝塚(基幹農道整備事業関連)  
いしづきかいづか

所 在 地：一関市花泉町永井字西狼ノ沢 17-1 ほか  
委 託 者：県南広域振興局農政部一関農林整備センター  
事 業 名：基幹農道整備事業夏川第3期地区  
発掘調査期間：平成22年7月5日～9月21日  
調査終了面積：1,620m<sup>2</sup>  
調査担当者 西澤正晴・溜 浩二郎  
主要な時代 繩文・平安



#### 遺跡の立地

本遺跡はJR東北本線油島駅より南東約3.3kmに位置し、仙北低地帯の北縁に形成された樹枝状に張り出す丘陵先端に立地する。調査地の標高は頂部で10m前後、調査前の現況は水田・畑地である。

#### 調査の概要

調査区は、丘陵を南北に横断しているため、地形上斜面部2箇所、頂部1箇所に分けられる。北側斜面から低地にかけて遺物包含層を確認している。丘陵頂部は、開田時にかなり大規模に削平されており、土坑1基、柱穴14個などわずかな遺構のみ残存していた。南側斜面からは、焼土4基、土坑3基が確認され、このうち2基からは古代の遺物が出土した。また、斜面下の低地からは灰白色火山灰が層状に広がっていることを確認している。遺物は包含層から出土した縄文土器を中心で、一部古代の土器が出土している。また、貝片や獸骨・魚骨などの動物遺存体等も採取している。遺物の総量は大コンテナ20箱である。



石崎貝塚遠景写真（南西から）

(14) 石崎貝塚(経営体育成基盤事業関連)

所 在 地：一関市花泉町水井字西狼ノ沢 17-1 ほか  
委 託 者：県南広域振興局農政部一関農村整備センター  
事 業 名：経営体育成基盤整備事業（夏川第3期地区）  
発掘調査期間：平成22年9月1日～9月21日  
調査終了面積：293m<sup>2</sup>  
調査担当者 西澤正晴・溜 浩二郎  
主要な時代 繩文



遺跡の立地

本遺跡はJR東北本線油島駅より南東約3.3kmに位置し、仙北低地帯の北縁に形成された樹枝状に張りり出す丘陵上の先端部に立地する。調査区の標高は丘陵頂部で10m前後である。調査前の現況は水田・畑地等である。

調査の概要

調査は、基幹農道事業分と並行して行われた。丘陵頂部を中心に調査区が設定されている。この頂部は調査前の現況は水田であったため、開田時に数m単位で削平されていることが聞き取りで判明した。本事業関連の範囲からは、大型の土坑7基を確認している。遺物は遺構内からは出土せず、時期は明確ではない。そのほかわずかに石器や縄文土器片が遺構周辺から出土している。



調査区全景（上が南）

## (15) 国分遺跡

所 在 地：奥州市胆沢区南都田字上広岡 445 番地ほか  
 委 託 者：県南広域振興局農政部農村整備室

事 業 名：経営体育成基盤整備事業 都鳥 2期地区

発掘調査期間：平成 22 年 6 月 18 日～8 月 31 日

調査終了面積：1,814m<sup>2</sup>

調査担当者 米田 寛・杉沢昭太郎

主要な時代 中世末～近世初頭



## 遺跡の立地

奥州市立南都田小学校の南約1.2kmに位置する。調査前の遺跡登録範囲の現況は、宅地、水田であり、今回の調査区は遺跡登録範囲の北東部の水田範囲に設定された。本遺跡は、標高83～87mの胆沢扇状地の福原段丘面上に位置する。国分遺跡の北端にあたる段丘崖上からは、北側の南都田小学校をはじめとする水沢高位段丘面上の遺跡を一望できる。また、本遺跡の南には16世紀後半の開基とされる宝寿寺が隣接する。

## 調査の概要

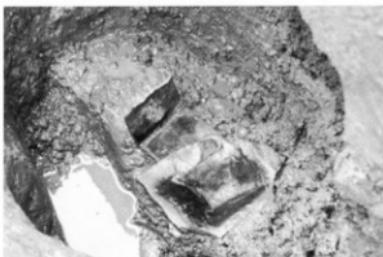
検出遺構は縄文時代以降が陥し穴状土坑13基、フラスコ状土坑1基、中世末以降が掘立柱建物跡5棟、溝跡20条、井戸状土坑6基、土坑13基、柱穴状土坑161個である。建物は近世初頭の三面庇建物と付属する小屋が検出された。出土遺物は須恵器・土師器数点、中世末～近世の陶磁器小コンテナ1.5箱、陶器製灯籠1点、礫石器中コンテナ1箱、鉄製品数点、木製品数点のほか、炭化種実、昆虫の羽根である。調査区中央の大溝や隣接する井戸状土坑からは、天目茶碗、瀬戸大窯産陶器皿、近世初頭の唐津産陶器皿、炭化種実、昆虫の羽根などが出土している。



陥し穴状土坑全景



中世末～近世初頭の溝（内容確認調査区）



井戸状土坑から出土した陶器製灯籠

(16) 川端遺跡

所 在 地：奥州市胆沢区南都田字大道 219 番地ほか  
委 託 者：県南広域振興局農政部農村整備室  
事 業 名：経営体育成基盤整備事業都鳥 2期地区  
発掘調査期間：平成 22 年 6 月 14 日～6 月 24 日  
調査終了面積：300m<sup>2</sup>  
調査担当者：米田 寛・杉沢昭太郎  
主要な時代：縄文・古代



遺跡の立地

奥州市立南都田小学校の南南西約400mに位置する。遺跡範囲には伊勢神社、南都田第13部落コミュニティーセンターがある。調査前の遺跡登録範囲の現況は、宅地と水田であり、今回の調査区は水田範囲に設定された。本遺跡は、標高82~85mの胆沢扇状地の水沢高位段丘面上に位置する。

## 調査の概要

調査区は3ヵ所に分かれる。検出遺構は溝跡3条、上坑1基である。いずれも時期不明である。出土遺物は縄文土器2点、土師器1点、石匙1点、剥片1点である。いずれも遺構検出時に出土し、遺構内出土遺物はない。調査区内は、耕作土の下位に黄褐色土層が位置することから、遺物の包含が認められる層は、水田造成時に削平されたと考えられる。



A区西侧全景



A区東側全景



日区全景



C区北側全圖

(17) <sup>つつみ</sup>堤 遺跡

所 在 地：奥州市胆沢区南都田字四ッ柱109番地ほか

委 託 者：県南広域振興局農政部農村整備室

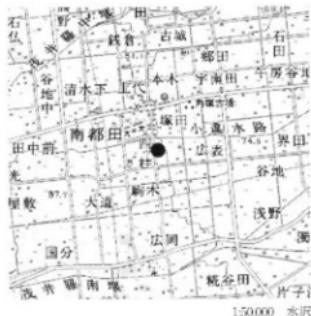
事 業 名：経営体育成基盤整備事業都鳥2期地区

発掘調査期間：平成22年6月1日～6月24日

調査終了面積：340m<sup>2</sup>

調査担当者 米田 寛・杉沢昭太郎

主要な時代 奈良～平安



## 遺跡の立地

奥州市立南都田小学校の南南東約300mに位置する。調査前の遺跡登録範囲の現況は、宅地、水田、畑地であり、今回の調査区は遺跡登録範囲西端の水田範囲に設定された。本遺跡は、標高80～81mの胆沢原状地の水沢高位段丘面上に位置する。

## 調査の概要

検出遺構は古代の堅穴住居跡2棟、堅穴住居状遺構1基、土坑1基のほか、時期不明の掘立柱建物跡1棟、土坑2基、溝4条、柱穴状土坑33個である。また、調査区南側には河川跡が確認された。出土遺物は須恵器・土器器中コンテナ1箱、陶器片1点、スクレイパー1点、鉄製品2点、粘土塊2点、炭化材数点である。遺物の大半が古代の堅穴住居跡から出土している。



1号堅穴住居跡遺物出土状況（奈良時代）



2号堅穴住居跡遺物出土状況（平安時代）



堅穴住居状遺構全景



調査区北側全景

## (18) 八反町遺跡

所 在 地：奥州市前沢区古城字南八反町47番地1ほか  
委 託 者：県南広域振興局農政部農村整備室  
事 業 名：経営体育成基盤整備事業古城2期地区  
発掘調査期間：平成22年9月1日～12月10日  
調査終了面積：3,210m<sup>2</sup>  
調査担当者 杉沢昭太郎・米田 寛  
主要な時代 中世初頭



### 遺跡の立地

八反町遺跡はJR東北本線前沢駅の北北東約4kmにあり、北上川右岸の標高33～34mの河岸段丘上に立地している。平坦な地形の中にも微高地が点在し、現況は畑地と水田になっていた。

### 調査の概要

調査区は遺跡の南端、中央部、北端部、西部に分かれている。遺構は12世紀後半の道路跡1条、掘立柱建物跡5棟、堅穴住居状遺構1棟、井戸状遺構2基、性格不明遺構3基、平安時代の堅穴住居跡1棟、堅穴住居状遺構1棟、河川跡1箇所、その他の時期不明の遺構としては掘立柱建物跡4棟、柱穴列3基、溝跡27条、土坑18基、井戸状遺構1基が検出された。幅約4.5mある12世紀後半の道路跡が北西～南東方向に延びており、これに沿うように掘立柱建物跡が4棟見つかっている。さらに北へ400m程離れたところからは井戸状遺構や性格不明遺構（粘土を採取した跡か）が検出された。11世紀や13世紀の遺構や遺物はなく、12世紀の期間だけ存続した集落と考えられる。

出土遺物は平安時代の土師器・須恵器、中世陶磁器、かわらけ、鐵製品などが中コンテナ1.5箱。下駄、柱材、杭等の木製品が大コンテナ1箱である。



道路跡と掘立柱建物跡

(19) 中畠城遺跡  
なかはたじょう

所 在 地：奥州市前沢区古城字水上西88番地ほか  
委 託 者：県南広域振興局農政部農村整備室  
事 業 名：経営体育成基盤整備事業古城2期地区  
発掘調査期間：平成22年9月1日～12月10日  
調査終了面積：2,564m<sup>2</sup>  
調査担当者：杉沢昭太郎・米田 寛・中村絵美・北田 煉  
主要な時代：中世後半



#### 遺跡の立地

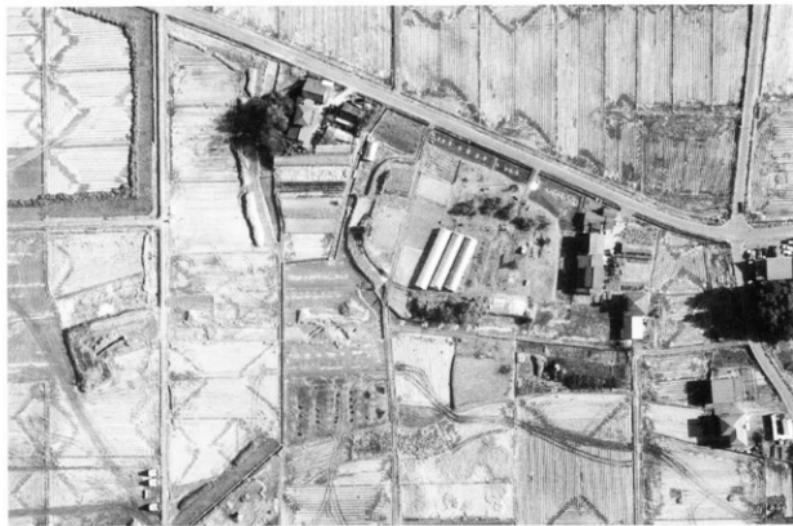
中畠城遺跡はJR東北本線前沢駅の北北東約3.5kmに位置している。水沢段丘高位面にある小規模な微高地を堀で囲んで城域としており、調査区の現況は標高32～34mの水田であった。

#### 調査の概要

「安永風土記」によると本遺跡は、樺山館（御城主樺山平次郎）と記載される城館である。調査区は主に城館を取り囲む堀の西側と北側にあたる。

検出された遺構には中世の堀跡5条、カマド状遺構1基、柱穴300個、縄文時代の陥し穴1基、旧石器集中区1箇所、時期不明の溝跡10条がある。複数ある堀跡は造りかえによるものと考えられる。

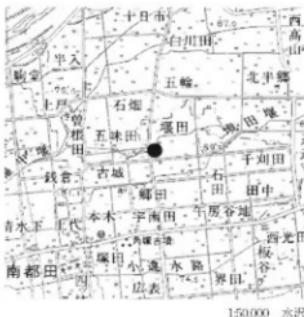
遺物では中世の陶器器が中コンテナ0.5箱、木製品が大コンテナ4箱、鉄器が数点、石器類小コンテナ0.5箱他が出土している。



遺路全景（上が東）

## (20) 堪田遺跡

所 在 地：奥州市胆沢区南都田字二丁目40-2ほか  
委 託 者：県南広域振興局農政部農村整備室  
事 業 名：経営体育成基盤整備事業（南下幅北部地区）  
発掘調査期間：平成 22 年 10 月 1 日～12 月 2 日  
調査終了面積：2,123m<sup>2</sup>  
調査担当者 川又 晋・小林弘卓  
主要な時代 平安



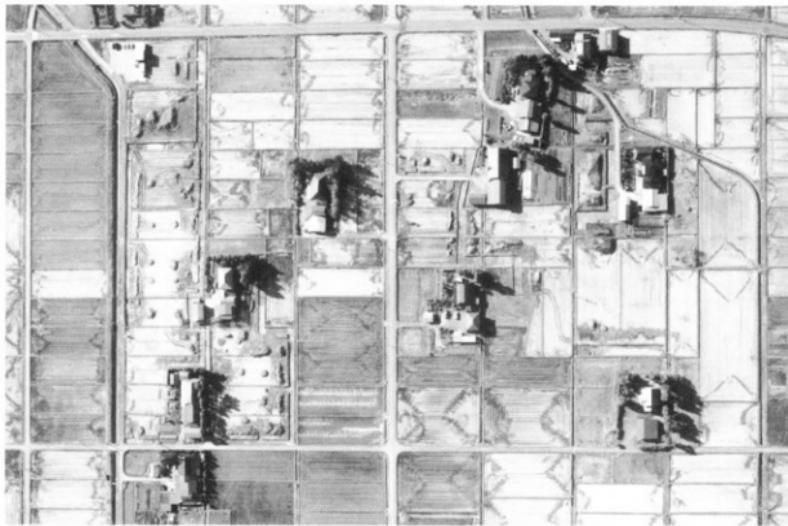
### 遺跡の立地

堪田遺跡は、JR東日本東北本線水沢駅から西約3.5kmに位置する。胆沢扇状地内の水沢低位段丘に立地し、標高は71m前後で、現況は水田・畑地などである。すぐ南側に机地遺跡が隣接する。

調査区および周辺部は、過去の圃場整備事業により、盛土・削平など大規模な造成が行われている。調査区の大半は旧河道や低地部分にあたるとみられ、盛土層の下はグライ化した粘土層であり、湧水が著しい。

### 調査の概要

堪田遺跡で検出した遺構は、土坑1基のみである。遺物は、平安時代の土師器・須恵器小コンテナ0.5箱、近世の陶磁器小コンテナ0.5箱が出上しているが、すべて遺構外出土である。



堪田遺跡と机地遺跡（直上から、右側が北）

## (21) つくえじ 机地遺跡

所 在 地：奥州市胆沢区南都田字机地81-1ほか  
 委 託 者：県南広域振興局農政部農村整備室  
 事 業 名：経営体育成基盤整備事業（南下幅北部地区）  
 発掘調査期間：平成22年10月1日～12月2日  
 調査終了面積：2,419m<sup>2</sup>  
 調査担当者 川又 晋・小林弘卓  
 主要な時代 平安



### 遺跡の立地

机地遺跡は、JR東日本東北本線水沢駅から西約3.5kmに位置する。胆沢扇状地内の水沢低位段丘に立地し、標高は71m前後で、現況は水田・畑地などである。すぐ北側に堰田遺跡が隣接する。

調査区および周辺部は、過去の圃場整備事業により、盛土・削平など大規模な造成が行われている。調査区の大半は旧河道や低地部分にあたるとみられ、盛土層の下はグライ化した粘土層であり、湧水が著しい。遺構を確認したのはごく一部の範囲で、微高地であったとみられるが、削平を受けている。

### 調査の概要

検出遺構は、平安時代の竪穴住居跡5棟、住居状施設1棟、溝跡2条である。竪穴住居跡のうちの1棟を除き、他の遺構はすべて1箇所で集中的に検出した。いずれの遺構も、床面近くまで削平され、遺構の残りは悪いが、遺物は比較的多く出土している。カマドを検出した1棟では、燃焼部付近から上師器がまとまって出土した。隣接する住居状施設では、炉跡の内部から大量の土師器片が出土している。

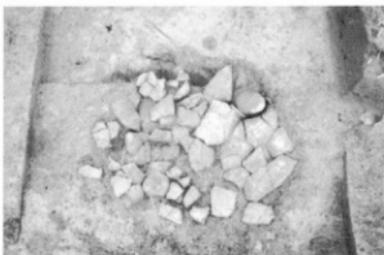
主な出土遺物は平安時代の土師器・須恵器で、竪穴住居跡を中心に大コンテナ3箱分出土している。調査区周辺には、ある程度の範囲で集落が広がることが予想される。



作業風景



平安時代の竪穴住居跡



住居状施設内の炉跡

(22) 安久沢東遺跡

所 在 地：奥州市前沢区古城字姥屋敷41番地ほか  
委 託 者：県南広域振興局農政部農村整備室  
事 業 名：経営体育成基盤整備事業白山地区  
発掘調査期間：平成 22 年 10 月 15 日～12 月 7 日  
調査終了面積：4,380m<sup>2</sup>  
調査担当者：西澤正晴、滝浩二郎、菅野 柏  
主要な時代：繩文、平安、近世



遺跡の立地

本遺跡はJR東北本線前沢駅より北東約2kmに位置し、胆沢扇状地の下位段丘上（水沢段丘）に立地する。遺跡の標高はおおむね30m前後であり、周囲の水田である低地よりも一段高い。調査前の現況は水田・畑地等である。

## 調査の概要

調査区は6箇所に分かれて点在する。検出遺構は、掘立柱建物跡2棟（平安時代か）、柱穴125個（古代～近世）、土坑5基（平安末1・古代2・不明2）、溝跡22条（古代～近世）、井戸跡2基（平安末1・近世1）、墓壙23基（近世）、焼上7基（古代4・不明3）である。

各調査区とも開田時の削平が多く及んでおり、遺構密度は低い。特筆すべき成果としては、12世紀代の遺構・遺物が発見されたことである。遺跡内には藤原秀衡の乳母を祀った姥神社があり12世紀の伝承が残る地域である。そこから当該期の遺構・遺物が出土した意義は大きいといえる。

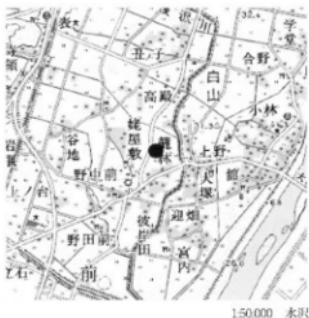
遺物は総量が大コンテナ2箱である。大部分は近世墓塚から出土品で、そのほか古代の土器に加えて瀬美産や常滑産陶器、手づくねかわらけがある。



## 調査区全景

## (23) たこう 田高Ⅱ遺跡

所 在 地：奥州市前沢区白山字鍵坂59番地ほか  
 委 託 者：県南広域振興局農政部農村整備室  
 事 業 名：経営体育成基整備事業白山地区  
 発掘調査期間：平成22年11月8日～12月17日  
 調査終了面積：1,480m<sup>2</sup>  
 調査担当者 星 雅之・北村忠昭・中村綾美  
 主要な時代 縄文・古代・中世・近世



## 遺跡の立地

遺跡は奥州市前沢総合支所の北東約2.5kmに位置し、北上川右岸の低位段丘上に立地する。現況は水田・畠地、標高は31～32m前後である。過去には平成8年・同14年の2回発掘調査が行われており、縄文時代・古代～中世の遺構・遺物が確認されている。今回の調査区は遺跡の北端に位置し、平成8年の調査区と一部接している。要調査範囲は3,480m<sup>2</sup>で、このうち1,480m<sup>2</sup>を終了した。未了の2,000m<sup>2</sup>は次年度発掘調査を行う予定である。

## 調査の概要

今回の調査では縄文時代の竪穴住居跡1棟、陥し穴状遺構1基、遺物包含層270m<sup>2</sup>、平安時代のカマド状遺構2基、不明遺構2基、中世の堀跡3条、墓壙1基、中世～近世の溝跡29条、土坑13基、柱穴状土坑（掘立柱建物跡を構成するものも含む）630個、時期不明の溝跡13条、土坑25基、不明遺構6基が検出された。

出土遺物は縄文土器（前期後葉が中心）大コンテナ14箱、土師器、陶磁器（中世陶器が中心）合わせて小コンテナ0.5箱、かわらけ1点、石器大コンテナ16箱、小刀1点である。

今年度の調査区では、遺構や遺物からみると、縄文時代から中世までのものが連續と重複していることがわかった。このなかでは遺物量からすると縄文時代が大半をしめるが、数が少ないものの11世紀から17世紀の遺物が出土したことは、県内でも少ない事例のため特記すべき成果といえる。遺構の大部分を占める柱穴（掘立柱建物跡）は、明確な時期を特定できていないが、この古代末から中世の間のいずれかに属すると想定される。このように、今回調査した遺跡北側については、主に中世期の遺構が中心に広がっていることが判明した。



調査区全貌（上が東）



中世～近世の掘立柱建物跡（上が北）

## (24) 山脈地遺跡

所 在 地：気仙郡住田町上有住字山脈地7-7ほか  
委 託 者：沿岸広域振興局土木部大船渡土木センター  
事 業 名：一般県道釜石住田線金ノ倉地区道路改良事業  
発掘調査期間：平成 22 年 7 月 1 日～ 11 月 15 日  
調査終了面積：2,827m<sup>2</sup>  
調査担当者 羽柴直人・福島正和  
主要な時代 縄文



### 遺跡の立地

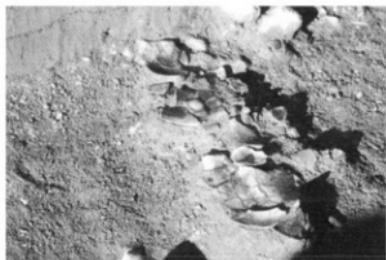
本遺跡は住田町役場の6.5km北に位置し、気仙川北岸の砂礫段丘に立地する。調査範囲は遺跡の中央部分に相当する。標高は171m前後で、調査前は水田として使用されていた。

### 調査の概要

縄文時代晚期前葉、前期後葉、前期前葉、早期中葉の遺構・遺物が検出された。晚期前葉は遺物包含層1箇所、竪穴住居跡1棟、土坑2基、前期後葉は遺物包含層1箇所、竪穴住居跡3棟、土坑6基、前期前葉は遺物包含層1箇所、早期中葉は遺物包含層1箇所が検出された。各時期の遺物包含層は、早期中葉以前に流れていた河川が、埋没していく過程で形成されたものである。埋没層の中位に十和田中揮火山灰が堆積しており、出土遺物、検出遺構の時期区分の根拠となった。また、前期後葉の住居跡の一つ（SI01）は、長径14mを越える大型住居跡である。遺物は縄文土器が大コンテナ80箱、石器が中コンテナ10箱出土した。その他の遺物は、円盤状土製品、石剣類、石製垂飾品、玦状耳飾が出土した。出土遺物は量的には前期後葉のものが他の時期よりも卓越するが、早期中葉の遺物も量的にまとまっており、「貝殻文土器」の良好な資料が得られている。



前期後葉の大型住居跡



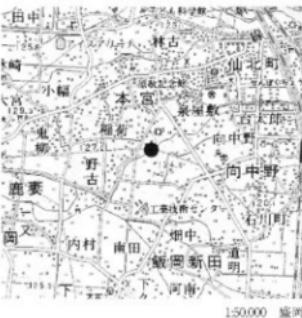
早期中葉貝殻文土器出土状況



河川跡発掘

## (25) のっこ 野古A遺跡 第30次調査

所 在 地：盛岡市下鹿妻字北36-3ほか  
 委 託 者：盛岡市都市整備部盛岡南整備課  
 事 業 名：盛岡市新都市土地区画整理事業  
 発掘調査期間：平成22年4月9日～8月9日  
 調査終了面積：9.005m<sup>2</sup>  
 調査担当者 小山内 透・中村絵美・杉沢昭太郎・米田 寛  
 主要な時代 古代



### 遺跡の立地

野古A遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から南西約1.5kmに位置する。栄石川によって形成された河岸段丘上に立地し、標高は124m前後である。調査区内には旧河道状の低い部分と微高地部分が存在する。平成22年現在で30次にわたる調査が行われており、検出された竪穴住居跡は100棟に手が届くところである。調査区は遺跡範囲の南東部に位置している。

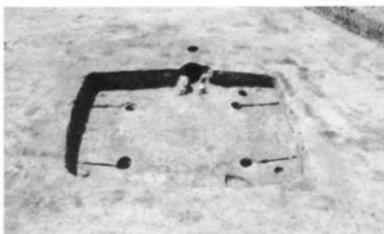
### 調査の概要

検出した遺構は、竪穴住居跡21棟・掘立柱建物跡1棟・土坑31基・住居状遺構2棟・焼土遺構11基・溝跡8条・陥し穴状遺構11基である。竪穴住居跡の時期は、平安時代が3棟、それ以外は奈良時代である。平安時代の住居跡は調査区の北側に分布しており、これまでの調査結果も合わせると遺跡北側に平安時代、南側に奈良時代の住居跡が広がる傾向がある。奈良時代の住居跡は互いに近接はしても重複はせず、大小合わせて数棟ごとのまとまりがみられた。微高地から旧河道の落ち際に焼土遺構が並んでいる。焼土遺構は長軸1m前後の隅丸方形～楕円形の穴で、底面または側面が被熱しており遺構内で焼成が行われたものと考えられる。

遺物は、土器器中コンテナ20箱・須恵器数点・石器（砥石・磨石）・土製品（紡錘車・玉類）・石製品（勾玉・切子玉）等が出土している。



竪穴住居跡内遺物出土状況



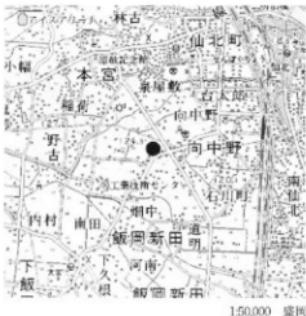
奈良時代の竪穴住居跡



旧河道際に並ぶ焼土遺構

## (26) 飯岡才川遺跡 第17次調査

所 在 地：盛岡市飯岡新田2地割46-1ほか  
委 託 者：盛岡市都市整備部盛岡南整備課  
事 業 名：盛岡南新都市土地区画整理事業  
発掘調査期間：平成22年10月4日～10月28日  
調査終了面積：4,000m<sup>2</sup>  
調査担当者 金子佐知子  
主要な時代 縄文・古代



### 遺跡の立地

遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅の南西約1.2kmに位置し、零石川が形成した低位段丘上に立地する。調査区は遺跡の東よりの部分で、標高は123m前後、北側の旧河道に向かって緩やかに傾斜している。現況は畠地、宅地である。

### 調査の概要

今回の調査は、表土を除去した後、遺構の検出までを行った。調査区は長芋の耕作により全体の約3割が深く搅乱を受けており、この部分の遺構の残存状況は悪い。

検出された遺構は、縄文時代の陥し穴と思われる土坑4基、古代の竪穴住居跡3棟、溝跡3条、土坑2基、近世と思われる土坑1基、時期不明の掘立柱建物跡1棟、土坑3基などである。従来の調査では本調査区西側隣接地の段丘縁辺部北端から古代の円形周溝が多く検出されたが、今回の調査区には及んでいない。また、遺跡南半の東流する旧河道付近では、縄文時代の陥し穴状土坑が多く分布しているが、今回検出された陥し穴状土坑は遺跡北辺の段丘縁辺部から検出されており、北側の旧河道も狩り場とされていた可能性が高い。

出土した遺物は、土師器・須恵器が小コンテナ0.5箱、近世以降の陶磁器が小コンテナ0.5箱で、表土もしくは遺構の検出面からの出土である。



陥し穴状土坑検出状況



竪穴住居跡検出状況



溝跡検出状況

## (27) 細谷地遺跡 第26次調査

所 在 地：盛岡市向中野字野原9-1ほか  
 委 託 者：盛岡市都市整備部盛岡南整備課  
 事 業 名：盛岡南新都市土地区画整理事業  
 発掘調査期間：平成22年4月9日～8月11日  
 調査終了面積：6,633m<sup>2</sup>  
 調査担当者 金子佐知子・星 雅之  
 主要な時代 古代・中世



## 遺跡の立地

遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅の南西1.5kmに位置し、零石川が形成した低位段丘上に位置する。調査区は遺跡の中央付近で、2箇所に分かれている。北側調査区は向中野館遺跡に接しており、調査前は自動車整備工場である。南側調査区は約100m離れており、宅地であった。

## 調査の概要

今回の調査では、古代の集落跡と北側に接する向中野館遺跡の塙の一部、中近世以降の建物跡が検出されたが、面積約3割が搅乱で、特に北側調査区の北東部分は遺構面が広く削平されている。

古代の集落は、奈良時代の堅穴住居跡2棟、平安時代の堅穴住居跡14棟、掘立柱建物跡4棟、土坑19基、堅穴状遺構1基、焼土1基、溝跡3条、畝間状遺構3箇所である。平安時代の集落には、倉庫と思われる2×2間程度の小型の掘立柱建物跡が伴う。溝跡2条は間隔約6mを保って、平行に南北に延びている。これらは、過去の調査においていずれも南側で約90度西方向に屈曲していることがわかつており、対になっていることが改めて確認された。畝間状遺構は過去の調査でも低地の埋没土上で検出されていたが、今回は堅穴住居跡の埋土中から2箇所見つかっている。

中世以降の遺構は、向中野館遺跡南辺を区画する塙の一部と2棟の掘立柱建物跡、柱穴跡2条であるが、堀跡埋土から出土した近世以降の陶磁器以外には遺物がなく、時期の特定が難しい。

近世以降は掘立柱建物跡2棟、墓壙を含む土坑8基、柱穴跡2条、道路状遺構2条がある。掘立柱建物跡は内部に土坑を伴っており、新旧2棟である。近世民家に伴う便所などの付属屋とみられるが、広い搅乱の境目にあり、主屋は削平されたものと思われる。

遺物は、土師器、須恵器が中コンテナ8箱、近世以降の陶磁器0.5箱、綠釉陶器破片1点である。



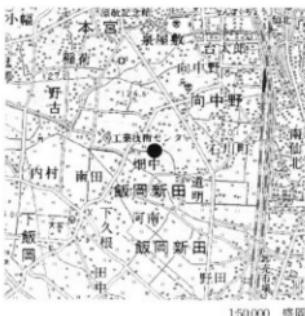
平行する溝跡



住居跡の埋土から検出された畝間状遺構

## (28) 矢盛遺跡 第27次調査

所 在 地：盛岡市飯岡新田2地割19-2ほか  
委 託 者：盛岡市都市整備部盛岡南整備課  
事 業 名：盛岡南新都市土地区画整理事業  
発掘調査期間：平成22年8月10日～11月10日  
調査終了面積：9,845m<sup>2</sup>  
調査担当者 小山内 透・金子佐知子・中村絵美  
主要な時代 縄文・近世



### 遺跡の立地

矢盛遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅の南方約3km、仙北町駅からは南西に約1.8kmに位置し、平石川によって形成された低位の沖積段丘上および旧河道に立地する。段丘高地は主に宅地と畠地、やや低い旧河道部分は水田として利用されており、標高は123m前後である。

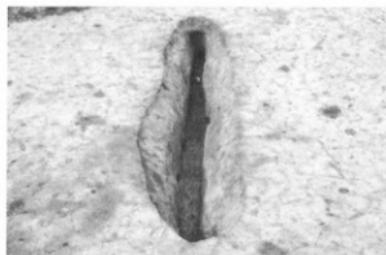
### 調査の概要

今回の調査はA～C区の3箇所について調査を行った。検出された遺構は、形態から縄文時代に帰属すると思われるフ拉斯コ状土坑1基と溝状の陥し穴状遺構13基、過去の調査成果と出土遺物・火山灰・重複関係から古代～中世と推定される土坑1基と溝跡4条、中世から近世と推定される掘立柱建物跡3棟、時期不明の竪穴状遺構3棟、土坑3基、溝跡13条などがある。縄文時代の陥し穴は南北に長いC区調査区の中央部でまとまって検出され、長軸長は3m前後で規格性が認められたが、長軸方向や配置にはほとんど規則性は認められない。火山灰が出土した古代の溝跡1条は12次調査区から続くものがB区で検出された。古代～中世と推定される溝跡は11次調査区・9次調査区から続くものがC区で検出されたが、過去の調査では時期が特定できなかったものである。掘立柱建物跡はすべてA区に位置し、1棟は部分的に19次調査で確認されていたものである。

出土遺物は、土師器の小破片が十数点と近世～近代の陶磁器類が中コンテナ1箱弱、鉄釘1点、古銭（寛永通寶）2点などが出土した。このうち遺構内出土は、C区の溝跡と土坑から土師器破片数点、A～C区の溝跡から陶磁器類数点、A区の掘立柱建物跡の柱穴から陶磁器類数点と鉄釘1点が出土したのみで、大半が表土・耕作土・盛土中のものである。



A区掘立柱建物跡



C区陥し穴状遺構

## (29) 中平遺跡

所 在 地：九戸郡野田村第13地割84番地121ほか  
 委 託 者：野田村  
 事 業 名：村道拡幅事業  
 発掘調査期間：平成22年9月1日～10月29日  
 調査終了面積：2,736m<sup>2</sup>  
 調査担当者 北田 煉・北村忠昭  
 主要な時代 縄文・古代



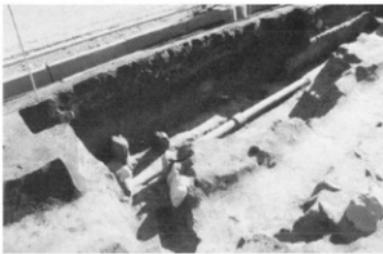
## 遺跡の立地

本遺跡は野田村役場の南西約1.8kmに位置する。調査区域は北上高地東端から半島状に延びる標高60～25mの台地上にあり、北側を平清水川、南側を泉沢川に挟まれる。現況は宅地及び畠地である。

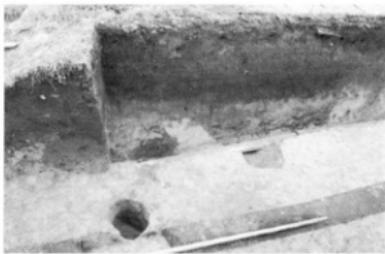
## 調査の概要

検出した遺構は、縄文時代の土坑1基・陥し穴状遺構14基、古代の竪穴住居跡8棟・土坑2基・不明遺構1基、時期不明の土坑1基・溝跡5条・柱穴状土坑33個である。出土した遺物は縄文土器少量・石鏃1点・土師器中コンテナ1箱・鉄製品4点・鉄塊1点・鉄滓少量・琥珀1点。

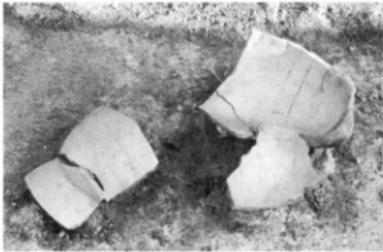
中平遺跡は昭和27年に発掘調査が行われ、平安時代の竪穴住居跡が相当数認められた。その後、県指定史跡として登録され、昭和40年には岩手大学草間俊一氏によって調査が行われている。今回の調査区は主に県指定範囲より段丘下段にあるが、古代集落が広範囲に拡がっていることが確認された。



竪穴住居跡



竪穴住居跡



竪穴住居跡出土土器



陥し穴状遺構

## (30) 佐原Ⅱ遺跡

所 在 地：宮古市佐原三丁目10番1ほか

委 託 者：宮古市

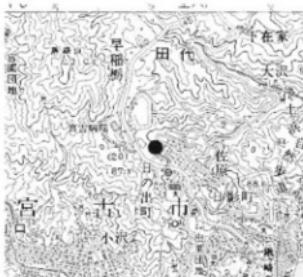
事 業 名：北部環状線道路改良事業

発掘調査期間：平成 22 年 11 月 15 日～11 月 25 日

調査終了面積：329m<sup>2</sup>

調査担当者 杉沢昭太郎・北田 熱・菅野 桜

主要な時代 繩文・弥生



### 遺跡の立地

佐原Ⅱ遺跡はJR山田線宮古駅の北北東約2kmに位置している。西から東に延びる二つの尾根に挟まれた傾斜地と平坦面からなり、調査前の現況は杉林と雜種地であった。遺跡の標高100～110mを測る。

### 調査の概要

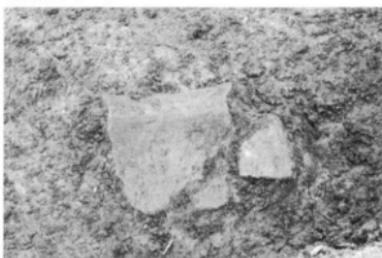
調査区は北側緩斜面と西側の緩斜面とが合流する場所にあたり、焼土が1基検出された。また、この焼土のすぐ近くからは弥生時代初頭とみられる甕が出土している。昨年度の調査ではこの時期の豊穴住居跡が西側の尾根から1棟検出されており、本遺構とは直線距離にして約20mと近い。調査区東側は小規模な沢となっており、ここからは縄文時代前期の土器が出土したが、遺構は確認されなかった。

出土遺物は縄文土器が小コンテナ0.5箱、弥生土器が小コンテナ1箱、石器類・鉄滓等が小コンテナ0.5箱である。

これまでの調査により遺跡西側にある尾根からの緩斜面部には弥生時代初頭頃の小規模な集落が広がっていることが分かった。縄文時代前期の遺物も出土しているが、調査区内からは遺構は見つかっておらず、西側尾根部の未調査区に遺構が存在する可能性がある。



焼土遺構



遺物出土状況

# 報告書抄録

ふりがな 書名	へいせいにじゅうにねんどはくつちょうさはうこくしょ 平成22年度発掘調査報告書						
原書名							
巻次							
シリーズ名	岩手県文化保存事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第588集						
編著者名							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下条町11地割185番地 TEL (019) 628-9001						
発行年月日	西暦 2011年3月18日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 経度 遺跡番号	北緯 東経 ... ... ...	調査期間	調査面積 調査原因	
立花南遺跡	岩手県北上市立花 盆地第10集落ほか	03206	MF66-2128	39度 16分 36秒	141度 07分 54秒	2010.08.02 ~ 2010.11.02	4900m <sup>2</sup> 北上川中流域 治水対策事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
立花南遺跡	集落跡	縄文・弥生時代	施工遺構1基、炭化物集 中1箇所	織文・弥生土器、石器			
			堅穴住居2棟、墓状遺 構1箇所、諷跡2条、燒 土遺構2基、炭化物集中 1箇所、旧河跡路3条	堅穴住居2基、墓状遺 構1箇所、諷跡2条、燒 土器群、灰窓器、焼成粘土塊、 鉄製品			
要約	弥生時代の遺構・遺物が少量と、8世紀後半～9世紀前半を中心とする遺構・遺物が検出された。						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 経度 遺跡番号	北緯 東経 ... ... ...	調査期間	調査面積 調査原因	
熊の沢Ⅱ遺跡	岩手県遠野市綾織町 新里27地割58-39 地内ほか	03201	MF54-0051	39度 19分 01秒	141度 29分 00秒	2010.10.05 ~ 2010.10.15	東北復旧自動車道 至秋田継続開通 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
熊の沢Ⅱ遺跡	散布地	縄文時代	陥入式状遺構2基	縄文土器1点	縄文時代の狩猟場		
要約	今日調査を行った熊の沢Ⅱ遺跡は縄文時代の狩猟場であることが判明した。						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 経度 遺跡番号	北緯 東経 ... ... ...	調査期間	調査面積 調査原因	
上日影遺跡	岩手県遠野市綾織町 新里22地割15-3 地内ほか	03201	MF30-0285	39度 19分 23秒	141度 29分 07秒	2010.09.17 ~ 2010.10.15	東北復旧自動車道 至秋田継続開通 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
上日影遺跡	散布地	平安時代	焼土構1基	土器群			
			時期不明	柱穴状土坑1個	縄文・平安時代の遺物散布地		
要約	今回調査を行った上日影遺跡は縄文・平安時代の遺物散布地であることが判明した。また、平安時代の焼土構が見つかることから、周辺に集落が存在する可能性がある。						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 経度 遺跡番号	北緯 東経 ... ... ...	調査期間	調査面積 調査原因	
高殿Ⅱ遺跡	岩手県奥州市前沢区 古城字高殿60番地6 ほか	03382	NE46-1301	39度 04分 19秒	141度 08分 43秒	2010.05.06 ~ 2010.05.01	経営体育会墓塚整備 事業古城2期地区
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
高殿Ⅱ遺跡	集落跡	平安時代	孤立柱建物跡1棟、土坑 11基、焼跡5基、 近井	土器群、須恵器、須恵土器、 焼成粘土塊、石器			
要約	今回の調査は、遺跡の南東端部を開削したことになる。検出された遺構や遺物などから、平安時代には集落の跡地にあたること、近世には塗装痕跡の一部となっていたことが明らかとなった。どちらの時期も調査区外の北側から西側へと遺構は延びている。						

北緯度・経度は世界測地系による数値である。

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第 588 叢

## 平成 22 年度発掘調査報告書

印 刷 平成 23 年 3 月 15 日

発 行 平成 23 年 3 月 18 日

編 叢 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒 020 - 0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地

電 話 (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

発 行 (財) 岩手県文化振興事業団

〒 020 - 0023 岩手県盛岡市内丸 13 番 1 号

電 話 (019) 654-2235

FAX (019) 625-3595

印 刷 株式会社五六堂印刷

〒 020 - 0021 岩手県盛岡市中央通 3 - 16 - 15

電 話 (019) 654-5610

---

©(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2011

